
飛べない不死鳥

グラディウス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

飛べない不死鳥

【Nコード】

N2107Q

【作者名】

グラディウス

【あらすじ】

いつ折れるか分からない翼で羽ばたき続けた、一人の少年。

不死鳥と呼ばれた彼は、その翼を失った。

翼を失った不死鳥は、光あるものに牙をむく。

これは、飛べない不死鳥と、輝き続ける少年の物語。

この小説はpixivで連載していた小説の改訂版です。

Character Introduction (前書き)

キャラクター紹介と言いつつ、紹介するのは一人だけです^^；
鈴奈さんのことを書きましたが詳しく決めていないところが多いので
後々変更することがあると思います。

Character Introduction

たかみや すずな
高宮 鈴奈

白恋中出身の元剣道部主将。16歳。

円堂たちがエイリア学園と戦った際、マネージャーとしてキャラバンに参加した。

状況判断に優れており、それを鬼瓦に認められ、後に彼の助手となった。

本人は助手だと言い切っているが、それなりの権限は持っているもよう。

サツカーの腕はそこそこ。本人曰く、「嗜む程度だよ」とのこと。

白恋中がエイリア学園の標的となった頃に偶然剣道部の強化合宿に卒業生として参加、外で走りこみをしていたときに円堂たちと鉢合わせた。

雷門中のことは、テレビで何度か見たことがあるくらいだったらしい。

剣道で育んだ比類ない瞬間的判断力を瞳子に買われ、キャラバンに参加した。

キャラバンに参加するまでは、同じ学校だった吹雪とはあまり面識がなかった。

普段は陽気だが、オンオフの切り替えが早く、いざという時は冷静になる。

だが、度を越すと鬼のようにキレる。仲間に対しては基本的には優しい。基本的には。

ちなみに円堂たちの間では、『彼女に喧嘩を売る』死亡フラグ』

という数式が成り立っている。素手でも強いらしい。
竹刀なんかもつてのほか。それこそ鬼に金棒である。

背丈は中の上。一之瀬と土門の中間くらい。

髪は紫色で、結構目立つアホ毛がある。天パ。

鬼瓦の助手として働いている割には、仕事時も結構ラフな服装。

小道具を入れるポシエットは携帯しているが、 unnecessary なのはあまり持たない。

？ 差し出された手の主は（前書き）

この小説は、もともと私がピクシブで書いていた小説の改訂版です。もう改訂どころか別の小説になってますが、

楽しんでいただければ光栄です。

アニズマとの相違点とかいろいろ激しいですが、よろしくおねがいします。

？ 差し出された手の主は

見上げるのは、白い天井。

窓から見えるのは、アメリカの大都市の町並み。

ベッドの隣に置かれた小さなデスクには、

開会式のときにタイタニックスタジアム前で撮った写真がある。

このメンバーで、あのスタジアムに立つはずだったのに。

あの試合、もし俺が出ることが出来ていたら。

この体にあの時の事故の後遺症が残っていなかったら。

後悔は、どれだけぬぐっても溢れてくる。

外から聞こえてくる小さな子の無邪気な声に、泣きそうになった。

手術は成功した。そう、成功したんだ。

けど、もう一度サッカーが出来るようになるかは分からない。

ちゃんと歩けるようになるかどうかすら危ういくらいだ。

フェニックス
不死鳥は何度でも蘇る――

皆にはそう言っただし、皆もそう言ってくれた。

けど、その言葉に自信はない。

不死鳥に死はない。けれど、

俺は本当に不死鳥なのか？

その疑問は、俺の中に波紋を広げる。

白い天井が歪んで見えた。自分の魂がここにはないような心地になる。

その時、からからとドアが開いた。

びくりとして見ると、そこにはビニル袋をぶら下げた土門がいた。

「・・・なんだ土門か」

「なんだってなんだよ」

胸をなでおろすと、そんな言葉が飛んできた。

「・・・足はどうだ？」

その言葉に、思わず口をつぐんでしまった。

今まさに考えていたこと。

何か言おうとしても、唇が震えて何も言えなかった。

強くシーツを握ると、頭に何かが置かれた。・・・土門の手だ。

「無理に答えさそうなんて思っちゃいねえよ。ほいリンゴ」

「・・・ありがとう」

手渡された真っ赤なリンゴに、無意識に秋の笑顔を重ねた。

「秋は、元気かな」

その一言に、今度は土門が言葉を詰まらせる。
けど、そんなのはほんの一瞬だ。すぐに口を開く。

「あ、ああ。日本代表の決勝トーナメント進出も決まったし、跳んで喜んでるんじゃないか？」

決勝トーナメント。その言葉に古傷がうずくような感じがした。

「土門、本当に・・・ごめん。俺がこんなにならなかったら」

「だからさ、それは言わねえ約束だろ？」

あの試合、鬼道はお前がいたら勝ててたかもって言ってた。
けどな。お前がいてあの試合勝ったとしても、俺たちはなにも進歩しなかった。

あの試合で負けたのは、俺たちがお前を頼りすぎてた象徴だった。
お前が気にすることなんて何もないさ」

「・・・ありがとう」

土門が俺のことを思ってくれている。それが嬉しかった。

「そうだ、テレビでも何かやってるんじゃないか？」

そう言って土門がテレビを付けると、FFIのダイジェストが報道されていた。

丁度、イナズマジャパンとオルフェウスの試合だった。

『この試合は、本当に白熱していましたね』

『イナズマジャパンが先制するとは予想外でしたが、とてもいい試合でした』

『決勝トーナメントは2週間後！イナズマジャパン対ザ・キングダムの試合があります。』

世界最強と言っても過言ではないようなチームに、イナズマジャパンはどう立ち向かうのか！』

『ザ・キングダムは言うまでもない素晴らしいチームですが、イナズマジャパンも今大会で実力をつけてきています。』

我々の予想など遥かに超えてくるでしょうね』

豪炎寺や鬼道、吹雪と順に映って行って、最後に円堂が映った。

あ、円堂がフィディオと握手をした。二人とも、楽しそうに笑っている。

俺もあの時、ちゃんと最後まで戦っていたら、今もあんな風に笑えていたんだろうか。

「・・・さすがだな、あいつら」

土門の声で、我に返った。

隣を見ると、彼も笑っていた。

「俺たちと戦ったときより、もっと強くなってるな」

「・・・そうだね」

その時ふと思って、土門に尋ねてみた。

「なあ土門」

「ん？」

「俺は本当に、不死鳥フエニックスのかな」

窓の外を見ながら言ったんだけど土門が一瞬、ぐっと唇を噛むの
が見なくても分かった。

けど、少し無理をするように、いつもの口調で言う。

「おいおい、らしくないぜ。」

誰がなんと言おうとお前は不死鳥だ。絶対フィールドに戻ってこ
れる！」

振り向くと、土門は笑っていた。

少し無理をしたような笑顔だったけれど、その気遣いが嬉しくて
俺は淡く笑った。

「んじゃあ、俺は帰るな」

「うん、今日はありがとう」

土門が帰った後、俺はずっと手元のリンゴを見つめていた。彼が手渡してくれたリンゴ。それが、今皆と俺を繋ぐ細い糸に見える。

これを手放したら、皆とのつながりが消えてしまいうようにも思えてきて、

少し寂しくなった。

土門は、俺は絶対戻ってこれると言ってくれた。それはすごく嬉しい。・・・けど、

円堂とはまた戦えるだろうか？

FFIが終われば、俺はアメリカに残り、円堂は日本に帰る。サッカーに復帰できるようになれば、俺は多分プロコースに行くことになる。

そうなれば、彼らと戦えるチャンスはゼロに等しくなるだろう。彼らと戦えるチャンスは、今しかないかもしれないのに。

思い通りに動かない脚が恨めしくて、ぎゅっと唇を噛んだ。

赤いリンゴに、爪が食い込んだ。

その時、からりとドアが開いた。

最初は、土門が戻ってきたのかと思った。・・・けど、違った。響いたのは、硬くて無表情な足音。

はっとして顔を上げると、そこにはひげを生やした大きな顔があった。

「・・・どうしたのかね？」

モノクルの奥の目が、ずっと細められる。

笑ったようだったけど、とてもそうには見えなかった。

ベッドの上で少し後ずさった俺に気づいたのか、その人は言った。

「私のことは知らなかったかな？ ガルシルド・ベイハン。

ブラジル代表ザ・キングダムの監督だ。」

ブラジル代表の監督？

イナズマジャパンとの準決勝を控えた大切なときに、どうしてもこんなところに？

「聞いたところ、君は昔の事故の影響が残っていたそうだな。

そして、手術を受けて成功はしたが、再びサッカーが出来るようになるかは分からない、と」

「・・・！」

どうして知ってるんだ、この人は。

手術を受けた後のことは、俺を含めたユニコーンのメンバーと、円堂たちしか知らない。

ブラジル代表の監督であるこの人が、知るはずなのに・・・！

「戦いたくはないのかね？ 彼らと」

それでも、その人は続ける。
彼らって誰のことだ？

「君は、イナズマジャパンと戦いたいのだろうか？今度こそ、全力で」
「・・・！」

心の中を見透かされているようで、目を見張るしかなかった。
目の前の人は、笑っている。土門や皆のものとは違う、影のある
笑み。

「FFIが終わってしまえば、彼らと戦う機会は無に等しい。・・・
なら、今戦えばいい」
「けど、俺は・・・！」
「脚の事なら、心配無用だ」

俺の言葉を遮って、その人は言う。
そして、ずっと手が伸びてきた。

「私とともに、彼らと戦わないか？」

この人が考えていることは、大体想像できる。
けど、円堂たちと戦うためには、この方法しかないのかもしれないな
い。

駄目だ、って声が聞こえた気がした。・・・けど、聞こえないフ

リをした。

ああ、今ならあの時の風丸たちの気持ち分かるよ。
堕ちたっていい。闇に染まったっていい。

俺はもう一度、彼らと戦いたい。あのフィールドで、向かい合いたい。ボールを追いたい。

円堂たちと・・・いや、円堂と戦いたい。

ただそれだけを願って、俺は差し出された手に手を伸ばした。

赤いリングが、俺の爪の痕を残したまま、白い床を寂しそうに転がっていった。

『差し出された手の主は、誰だったの？』
『それはね、』

天使の仮面を被った悪魔だったんだよ
『』

？
差し出された手の主は（後書き）

あれ、ガルシルドさんのフルネームってこんなんでしたっけ？
間違ってたらすいません・・・

やっぱり間違えてましたね・・・すいません

？
見つけれないその背中

ライオコット島、ジャパンエリア。

イナズマジャパンの宿舎の前に、一人の少女が立っていた。
彼女は何のためらいもなく、その戸に手をかけた。

「やつほおーっ、みんなっー！」

そして、叫んだ。

突然の訪問者に、騒ぎが起こらない訳もなく。

「たっ、高宮！？」

「うはあ、久しぶりだなあ！」

風丸と円堂を筆頭に、イナズマジャパンのほとんどがその少女の
周りに集まった。

この少女、名を高宮鈴奈。

白恋中出身の16歳にして、鬼瓦刑事の助手として働いている。
かつてはマネージャーとして、エイリア学園と戦ったのである。

「あの事件以来だから、本当に久しぶりですね！」

春奈がぴよんぴよんと跳ねながら言った。
兎さながらの可愛さである。

「そうだねえ。で、何々？今度はブラジルと対戦するんだっけ」

「ああ。今から2週間ほどだ」

「あそこのチームはすごいからねえ……。ま、がんばって！」

Vサインをつくって笑う彼女に、円堂は得意そうな笑顔を浮かべた。

「で、今日は何の用だ？」

イナズマジャパンの監督・久遠が、腕組みをしながら言った。

「何って言われても……。皆を応援しに来たんですよ。って、そんなに睨まないで！」

高宮は大げさに肩をすくめて見せると、久遠は小さくため息をついた。

その時、秋の携帯が鳴った。

「誰かしら？」

その場の面々が見つめる中、秋は携帯に出た。

「もしもし？」

『秋か？』

「土門君じゃない！久しぶり！」

仲間の名前が出たことで、その場に柔らかな雰囲気が漂う。
だが。

『ちょっと聞きたいんだけどさ、そっちに、一之瀬来てないか？』

「一之瀬君？来てないけど・・・どうかしたの？」

『・・・病院からいなくなったんだ』

「え？いなくなった？」

『ああ。今、こっちに帰ってきたユニコーンのメンバーで探してる
ところなんだ』

突然の事態に、秋は一旦携帯から顔を離れた。

「土門、何だつて？」

「・・・一之瀬君が、病院からいなくなったって」

「ええっ！？」

「大方、病院抜け出してサッカーでもしてるんじゃないのか？
手術も成功したんだろ？」

風丸の言葉に、秋は内心うなずいた。

「もしもし、土門君？

今みんなに伝えただけど、一之瀬君ってもうサッカーできるの？」

『無理だ。まだ絶対安静の状態だった。』

手術は成功したけど、まともに立って歩くのだって難しかったんだよ。』

「それじゃあ・・・」

『ああ、不自然すぎる。だから俺たちも、メンバー総出で探してるんだけど・・・』

「・・・見つからないのね？」

『ああ』

不安と焦りが、募っていく。

その時、高宮が秋に近づいた。

「木野さん、ちょっと替わってくれる？」

「あ、はい・・・」

秋から携帯を受け取ると、高宮は真剣な表情で言った。

「土門君、私。高宮だよ」

『高宮か、久しぶりだな』

「生憎、ゆつくり話してる時間もなさそうだね」

『・・・やっぱり、お前もそう思うか』

「うん、こっちの仕事上、そう思っちゃうな。

で、相談なんだけどさ。警察に正式に搜索願を出してくれない？
そうすればかなりの人数使って、こっちでも一之瀬君を搜索できる」

『・・・分かった。実はさ、俺たちの監督もさっきからそう言ってたんだ。

俺も出来るだけ早くそっちに行くから、それまで頼む』

「了解。また電話するね」

そう言つて高宮は通話を終わると、携帯を秋に返した。
その瞬間、メンバーたちが口々に言った。

「高宮、どういうことだ」

「搜索願とか警察とか、話についていけないっスー！」

騒ぎ出すメンバーたちに、鋭い一言を放った男がいた。

「へっ、たかが一人いなくなっただけで、随分と騒がしくなるんだな」

不動だ。

彼の物言いに、染岡が食って掛かった。

「不動、その言い方はなんだ！一之瀬は俺たちの大切な仲間だ！それをたかが一人呼ばわりするのかッ！」

「やめろ染岡！」

それを、円堂がなだめようとする。

高宮は腕を組み、言った。

「たかが一人っていう言い方は確かにどうかと思うけど、不動君の言う通りだよ。」

騒ぎ立ててたって事態はなんにも変わらない」

冷静に言う高宮に、染岡も口を閉じた。

最初とは打って変わり鋭い眼差しで、彼女は続けた。

「簡単に説明すると、まずアメリカの病院から一之瀬君が消えた。で、土門君やユニコーンのメンバーたちが捜してたらしいの。」

けど、たった20人たらずで捜すのには無理がある。

けど、警察に正式に捜索願を出してもらえれば、わたしたち

警官使って捜すことができるから、そうしようかって話をしてたの。

土門君もアメリカからこっちに戻ってくるって」

「じゃあ、僕たちはどうしたらいいの？」

吹雪が言うと、高宮はにっと笑った。

「貴方たちのキャプテンを見てみて？」

その言葉に、その場にいた面々は円堂に視線を送った。
当の彼は、すでに決断していた。

「よし！一之瀬のこと捜しに行くぞ！」
「待て」

ストップをかけたのは、久遠だった。

「久遠監督！？」

「準決勝の前だ。練習を疎かにすることは許さん」

彼の言い分ももつともだった。
だが、円堂たちは引かなかった。

「一之瀬は俺たちの大切な仲間なんです！」
「帰ってきたらその分練習しますから、捜しに行かせてください！」
「久遠監督」

わいわいとメンバーたちが言う中、高宮が静かに言った。

自然と、あたりが静まる。

「（あの人物が関わっていたら厄介ですから・・・）」

と、彼女は口だけを動かして言った。

その意図を読み取った久遠は、静かにうなずいた。

「・・・特別に許可する。だが、くれぐれも怪我のないように」
『はいっ！』

イナズマジヤパンのメンバーたちは、まず手始めにとアメリカエリアに向かった。

アメリカエリアは広い。

しかも、細い路地が入り組んでいるところもあり、搜索はかなり困難だった。

いくつかのグループに分かれてアメリカエリアに入り、
円堂は秋と高宮、鬼道と一緒に行動していた。

「やっぱりいないか・・・」

高宮がため息をつくど、どこからか足音が聞こえてきた。

「エンドー！」

その声に振り向くと、そこにはジャージを着たマークとディランがいた。

「マーク！ディラン！」

「久しぶり。・・・ユーたちもカズヤを捜しにここへ？」

「ああ・・・。だが、どうやらはずれのようだな」

「ジャパンエリアのほうも捜したんだけど、そっちにもいなくて・・・」

秋が思いつめたように言うと、高宮がまとめるように言った。

「こうなると、他の国のエリアにいるとも考えづらいかな・・・。
いるとすれば、やっぱりアメリカか・・・」

「そうだな。あっちでは俺たちのチームメイトが捜してくれているし、

ドモンもこっちに合流してくれるらしいし」

その時、円堂はある事が気になった。

「・・・あれ？マークとディランは、高宮とは知り合いなのか？」
「直接会ったのは初めてだけど、カズヤが前に写真を見せてくれたから、それでね」
「あー、なるほど」

結局、アメリカエリアでは一之瀬を見つけることは出来なかった。

それから二日後。

何の手がかりもないまま、時間は過ぎていった。
そんな時、宿舎の前に真っ黒な手紙が置いてあるのをヒロトと木暮が見つけてきた。

封筒に入れられているが、差出人の名前はない。
それは久遠の手から高宮に渡され、彼女が静かに封を切った。
中から現れたのは、一枚の紙切れ。
そこには、

『ブラジルエリアに来い』

赤い字でそう綴られていた。
高宮は注意深くそれを眺めていたが、不意に顔をゆがめた。

「最悪だ・・・」

彼女はそう言って拳を握ると、言った。

「円堂君、木野さん。今すぐブラジルエリアに行くよ！」
「え!？」

突然言われた秋は驚いたが、彼女は瞳で語った。
今はつべこべ言っていられない、と。

「久遠監督。こんなことする奴、たかが知れてます。
このことを引きずれば、みんなの準決勝もどうなるか分からない。
だから、円堂君と木野さんを連れて、ブラジルエリアに行きます。
・・・許可をください」
「・・・そういうときは選択肢を示してから言うものだ」

行け、と久遠は言った。

高宮はうなずくと、イナズマジャパンのメンバーたちを振り返った。

「ごめん皆、事情はあとでちゃんと説明する。だから、今はちょっと待っててくれない？」

彼らがうなずくのを確かめ、彼女は円堂と秋を見た。

「一之瀬君は、ブラジルエリアにいますか？」

「それは分からない。けど、可能性はある。・・・それも、最悪の可能性がね」

「どっちにしろ行くしかないさ。そうだよな？」

「うん、円堂君の言うとおり。・・・さて、それじゃあ行こうか」

『このかくれんぼに、ヒントはあるの？』

『ちゃんとう意してあるよ。・・・真っ黒な招待状がね』

？ 強かったはずの絆の系は

ブラジルエリアに存在する、巨大な屋敷。

パキスタンのバードシャーヒー・モスクを模したようなその屋敷の片隅に、

人影がちらほらとしていた。

レンガで組まれた壁に背を付け、鈴奈は屋敷をうかがっていた。屋敷の中に進入する裏口まで、ざっと150メートルと言ったところか。

視線を屋敷から逸らさず、鈴奈は背後の二人に言った。

「円堂君、木野さん。裏口まで一気に突っ切るよ。」

けど、なにがあるか分からないから、私のあとについてきて」

「おう！」

「はい」

3人は壁の陰から飛び出すと、広い前庭のような場所を走り抜けた。

命がけに等しい全力疾走。

秋はおるか普段鍛えている円堂でさえも、押し掛かってくる重圧プレッシャーに息を荒げた。

不意に、鈴奈が声を潜めて言った。

「ガルシルドの屋敷にしては、無防備すぎる。そう思わない？」

確かに、と円堂と秋は思った。

ここに一之瀬がいようとまいと、ここは警備が厳しいはずだ。少なくとも、以前忍び込んだときはこんなものではなかった。

何も起こらないのは、無防備と言うのに相応しいだろう。いや。

3人は思考をめぐらせる。

あえて、こちらを自分の懷に招きいれているのではないか？

そして自分たちは、罠にかかった愚かな兎――。

そんな思いが、彼らの脳裏に浮かんた。

晴れていたはずの空は、いつの間にか曇天に姿を変えていた。

鈴奈が、唐突に立ち止まった。

勢いづいていた円堂は彼女の背中に飛び込みそうになるが、それを何とか抑える。

「鈴奈さん？」

肩で息をしながら秋が声をかけると高宮は、ぎりっ、と齒軋りをした。

「最悪だ。ごめん二人とも。私の予感、的中しちゃったよ。どうやらビンゴみたいだ」

どういふことかと尋ねようと円堂が口を開いた、まさにその瞬間。

3人の頭上から、声が降り注いだ。

「やっと来たね」

凜とした響きを持つその声に、秋は目を見開いた。
屋敷の屋根の上に、小柄な人影が座っていた。
その影は屋根から空中にふわりと飛び出すと、3人から少し離れたところに着地した。

「・・・い、一之瀬君・・・！」

目の前に降り立ったのは、以前と変わらない彼。
だが、違っていた。

何が違う？

無邪気なその瞳も、はねた茶色の髪も、何も変わっていない。
では、何が。

その身に纏うもの、漆黒に染まるユニフォームか？
それも、違う。

形があるものではないのだ。

瞳の奥には暗い影を、その身には以前とはまったく違う気を纏っていた。

こちらの心情などお構いなしに、一之瀬は言った。

「ずっと待ってたんだよ？君たちが来るのを」

「そりゃどうも。で、何で貴方がここにいるわけ？

今は病院で絶対安静の状態でしょう。いろんな過程をすっ飛ばしすぎじゃない？」

「ああ、それなら・・・」

「余計な情報を相手に与えるな」

突然響いた声に、秋は身を竦^{すく}ませ、円堂は視線を鋭くした。

秋を背に庇いながら、鈴奈は声の主を睨み付けた。

「どうせ分かるんだし、隠さなくたっていいんじゃないですか？
・・ガルシルド様」

「こいつは、何を考えているか分からん薄汚い子狐だ」

「お褒めいただきどうも。・・・で、私が話したいのは一之瀬君な
んだけど」

口調こそ軽いものの、鈴奈は敵意をむき出しにしていた。
ガルシルドの隣で微笑む一之瀬に、秋は言った。

「一之瀬君、どうしてそこにいるの・・・？」

秋の言葉に、一之瀬は笑みを崩さずに返した。

「簡単だよ。円堂ともう一度戦いたいんだ」

「もう一度、って・・・何でだよ！？」

またサッカー出来るようになったら、いつでも試合できるだろ！

「？」

「本当にそうかな？」

円堂の問いに、一之瀬はなお笑顔を崩さない。

「俺は、サッカーに復帰できるようになれば、多分プロユースに行くことになる。」

そうなれば、君と戦える機会なんて無に等しい・・・。

そんなときに、ガルシルド様に声をかけてもらったんだ。

一緒にイナズマジャパンと戦わないか？・・・ってね！」

「そんな・・・」

顔を真っ青にする秋とは対照的に、鈴奈は静かに一之瀬の言葉を聞いていた。

「あの時の試合、俺は最後までフィールドに立っていらなかったけど、今なら出来る。最後まで戦える！」

このフィールドに、もう一度魔術をかけてあげるよ！」

狂ったように明るく笑う一之瀬に、円堂は悪寒を覚えた。
この笑顔を、自分は知っている。

エイリア学園マスターランク、ザ・ジェネシスを倒し、稲妻町に帰ってきたあの時。

あの笑みと、酷似していた。

鈴奈も、体に走る鳥肌を抑えようと躍起になっていた。

「・・・3日後、ここで戦おう。待ってるよ、円堂」

そう言うと、一之瀬は静かに踵を返し、屋敷の中に消えていった。まるで彼らをあざ笑うかのように、空から土砂降りの雨が降り注いだ。

雲の合間を稲妻が走りぬける中、ガルシルドは勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「心しておくんだな・・・」

円堂たち3人に宣戦布告し屋敷の中に戻った一之瀬は、まっすぐに屋内練習場へ向かった。

扉を開けて照明をつけると、

2つのサッカーゴールと籠に積み上げられたボールが現れる。

一之瀬は籠からボールを取ると、それを目の前のゴールに叩き込んだ。

ザパァン！

一つ、また一つと、ボールがゴールに吸い込まれていく。

もう20ほどは蹴ったかというときに、入り口のドアが開く音がした。

「張り切ってますね、一之瀬君」
「ヘンクさん！」

この数日で見慣れた、我らがキャプテン。
体型からはあまり想像できないが、その俊敏さを一之瀬は知っていた。

「円堂との試合、やっと日が決まったんだよ！
3日後、ここのフィールドで。それまでにちゃんと調整してきたんだ！」
「そうですか。くれぐれも、怪我だけはしないでくださいね」
「もちろん！」

一之瀬が言うと、ヘンクは部屋を出て行った。
どうやら、近くを通ったらボールを蹴る音がしたから覗いてみた
だけだったらしい。

一之瀬は思う。

ずっと自分の中にあった思いの塊。
けれど、円堂と戦えば全てが終わる。そう、終わるんだ。

ボールがまた一つ、ゴールに吸い込まれていった。

『強かったはずの絆の糸は、どうなってしまったの？』

『悪魔の笑みと雷鳴の轟きと一緒に、崩れて消えてしまったんだよ』

？
翼を無くした不死鳥は

イナズマジャパンの宿舎に帰ってきた鈴奈たちは、
メンバーたちと監督に今の状況を簡潔に伝えた。

その言葉の一つ一つは、彼らを絶望させるのに十分だった。

「そんな・・・一之瀬先輩が・・・」

「あいつはそんな奴じゃないって信じてたのに・・・」

壁山と風丸の二人が呟くように言った。

思いは、皆同じだった。

「・・・けど俺は、一之瀬の気持ちを否定することはできねえな・・・」

静かに言ったのは、染岡だった。メンバーの視線が彼に集まる。

「俺、エイリア学園と戦ったとき、脚を怪我してキャラバン降りた
だろ？」

一緒に戦いてえのに、戦えない。傍観することしかできない。
一之瀬も、そんな気持ちだったんじゃないかと思つてさ・・・」

その言葉に、全員が沈黙した。

豪炎寺や吹雪は、似た境遇に小さく拳を握った。

暗い影を振り払うように、鈴奈が言った。

「試合は3日後。それまでに、彼らに対抗できる力をつけないとね」
「・・・なら、俺たちも混ぜてくれよ」

突然響いた声に、メンバーたちは一斉に振り返った。
そこには、土門、マーク、デイランの3人がいた。

「カズヤのことを思うのはミーたちも同じだ」
「それに、あいつの思いに気づけなかった俺の責任もある」
「頼む、俺たちのその試合に参加させてくれ！」

切羽詰った声で言う土門の姿に、メンバーたちは久遠の顔をうかがった。

彼はしばらく3人を見つめた後、言った。

「・・・許可しよう。ただし、代わりに3人抜けてもらう。いいな？」

風が窓を叩く中、久遠は淡々と言った。
メンバーたちは、固唾を吞んで次の言葉を待つ。

「土門、マーク、ディランの代わりに、木暮、土方、染岡に抜けてもらう」

「・・・！」

告げられた3人は、それぞれに顔を歪めた。
だが、

「皆、頑張つてよ！」

木暮はそう言つと、にやりと笑つた。

「おう！やってやるさ！」

円堂が力強くガッツポーズを取つた。
それに続いて、メンバーたちがそれぞれ声のあげる。
そこで、しばらく黙っていた鈴奈が言つた。

「けど、一之瀬君たちとの戦いは一筋縄ではいかないと思うよ」
「そりゃあ、ミーたちの戦術とか、知ってるからなあ・・・」
「それもあるけど、ちよつと違うね」

ディランの言葉に首を振り、彼女は続けた。

「一之瀬君の厄介なところは、願いが純粹なところなんだ」
「・・・？どういうこと？」

吹雪が首をかしげた。

「・・・黒歴史掘り返すようで悪いんだけど、
以前風丸君たちがダークエンペラースとして現れたときのこと、
覚えてるね？」
「もちろんだが・・・それがどうかしたのか？」

鈴奈は、風丸に視線を滑らせた。

「あの時、風丸君はどんなことを思ってた？」

まるで心の内側を見透かそうとしているかのような鈴奈の視線に、
風丸は思わず目をそらした。

「あまり覚えてないけど・・・エイリア石で強くなったのを、
円堂に見せたいとか・・・そんなとこだ」
「・・・やっぱりね。ありがとう風丸くん」

風丸に淡い笑みを見せると、彼女は一瞬で真剣な表情に戻った。

「風丸君の場合は、エイリア石で強くなったところを見てほしいって思いだった。」

けど、一之瀬君はそんなことじゃない。“円堂君と戦いたい”。それだけなんだよ。

・・・つまり、余計な思いが一切無い。それが怖いんだよ」

「なるほどね。けど、それに勝つためにはどうしたらいいのかな？」

「あら、ヒロト君は一度経験してるはずでしょ？」

ヒロトの疑問をさらりと流し、高宮は円堂を見た。

「それよりも強い思いを、ぶつけてやればいい」

「えらく簡単に言うんだな・・・」

鬼道が少し呆れ気味に言ったが、鈴奈は聞こえないフリをした。

ユニコーンの3人を入れた練習が始まった。

まずは、それぞれのポジションごとの練習をする。

「ユニコーンブースト・改!!」

「真・イジゲンザハンド！」

ディラン、マークの必殺技と、円堂の必殺技が激しくぶつかり合う。

互角かと思われた二つの技は、一瞬で均衡を崩した。ユニコーンブーストはイジゲンザハンドを突き抜けはしたものの、バーに当たってゴールにはならなかった。ボールを拾ってきた円堂は、マークとディランに走り寄った。

「流石だな！ちゃんと止められなかったぜ！」

「俺たちだって何もしていなかったわけじゃないんだ」

「今度はゴールに叩き込んでやるヨ！」

そこに、豪炎寺がやって来た。

「これだけのメンバーがいるんだ。グランフェンリルの練習も出来るんじゃないか？」

「それいいな！やってみるか？」

二人の言葉に、ディランとマークはにっと笑った。

「いや、グランフェンリルは使わないつもりさ」

「ここはカズヤが帰ってくる場所だからな！」

「そっか、そうだな！」

4人の姿をベンチから見ていた鈴奈は、ある決心をした。
・・・彼らなら、私が編み出したあの技を完成させることが出来る。

「・・・豪炎寺君、基山君、虎丸君、ディラン君、マーク君！」

それぞれの場所にいた5人は、鈴奈のところに走り寄った。

「どうしたんですか？」

虎丸が尋ねる。

鈴奈はしばらく黙った後、はつきりと言った。

「あなたたちに、私の編み出した必殺技を完成させてほしいんだ」

「何で、こんなことになっちゃったんスカねえ・・・」

不意に、壁山が言った。

その言葉に、一緒に練習していた風丸、吹雪、飛鷹、立向井、綱海の5人は、

一度手を止めた。

「おいおいどうした壁山！怖気づいたのか？」

綱海が茶化すが、壁山は首を振った。

「オレの知ってる一之瀬先輩は、明るくて、いつも笑ってて、どんなことも諦めない人ッス・・・。

なのに、どうしてあんなヤツらと、って思ってた・・・」

「それは、俺たちの勝手な思い込みだよ、壁山」

地面に転がったボールを手に取り、風丸が言った。

「それは、俺たちが作り上げた『一之瀬一哉』っていう幻だよ。

・・・人の本当の姿なんて、誰にも見えないんだ。

俺たちの見えないところで、泣いてるかもしれない。悲鳴を上げてるかもしれない。

けど俺たちは、その本当の姿を捜していかなきやいけないんだ。たとえそれが、真つ暗闇の中にあるとしてもな」

「僕も風丸君と同感かな。

エイリア学園と戦ったとき、僕もそうだったから。

僕は絶対的な『エースストライカー』じゃないといけない。

みんなの期待に応えなきやいけない。そう思って、自分で幻を作

り上げてた。

きっと彼もそうなんだと思う。

だから、今僕たちがやるべきことは、少しでも力をつけることなんじゃないかな？」

二人の言葉に、立向井と綱海は互いに顔を合わせ、大きくうなずいた。

「よっしゃ！そうと決まれば特訓だな！」

「俺も魔王ザハンドの精度を上げていかないと！」

「そうだな。なら、飛鷹は真空魔の特訓だな」

「おう！」

「じゃあ風丸君は、僕と一緒にザ・ハリケーンの特訓をしない？」

「任せとけ！」

その光景を遠巻きに見ながら、鬼道は呟いた。

「3日後、か・・・」

約束の時は、あつという間にやって来た。

イナズマジャパンのメンバーたちは、ガルシルドの屋敷に来ていた。

フィールドの真ん中に立つ彼らの前に、人影が現れる。
ブラジル代表の監督―ガルシルド。

その後ろに控える、ガルシルドのチームの選手と思われる者たち。
そして、一之瀬だった。

秋と鈴奈の話を聞いて覚悟はしていたものの、円堂たちは大きな
衝撃を受けた。

「一之瀬・・・！」

土門がうなるように言った。
対する一之瀬は、ただ笑みを浮かべるだけ。

「・・・待ってたよ、円堂」

“円堂君と戦いたい”。それだけなんだよ。
鈴奈の言葉が、メンバーたちの脳裏をよぎった。

「さあ、始めようか」

一之瀬の瞳が、紅く煌いた。

『翼を無くした不死鳥は、どうしたの？』
『光ある者に、その牙をむいたんだよ。』

彼にとって、光は絶望でしかなかったからね』

？
底なし闇に希望の光は

ガルシルドの屋敷のフィールドで、二つのチームが向かい合う。
緊張の色を隠せないイナズマジャパンのメンバーたちに、
一之瀬がにっこりと笑いかけた。

「久しぶりだね、みんな。円堂とは3日前にも会ったけど、
他の皆はFFI本戦の総当たり戦以来かな？」

メンバーたちの先頭に立っている円堂は、何も答えない。
ただ真っ直ぐに、一之瀬のことを見つめていた。

対する一之瀬も、円堂以外は目に入っていないように見えた。

場の空気が凍り始める中、声を上げたのは染岡だった。

「一之瀬、何でお前がこんなことを・・・。
しかもよりによって、こんなくだらねえ方法を取ったんだ！」
「くだらない？」

一之瀬はくすりと笑うと、続けた。

「俺の聞き間違いかな？くだらないだって？
そのくだらない方法に先に手を出したのは、染岡、君じゃないか」
「・・・！」

唇を噛む染岡を一瞥し、一之瀬は視線を滑らせた。

「ああ、ここには当時のキャプテンもいるんだっけ？」
「！」

風丸も、あの時の惨事を思い出し、顔を俯けた。
一之瀬の言動に豪炎寺や鬼道が反発しようとしたが、彼らよりも行動が早い者がいた。

「いい加減、そのお喋りな口を閉じたらどうなの？」

吹雪だった。

普段の彼とは比べ物にならないほどの険しい表情が、
以前彼に別の人格として宿っていた彼の弟・アツヤを連想させた。

その怒気をもともせず、一之瀬は飄々^{ひょうひょう}と言った。

「へえ、吹雪が怒るのは初めて見たな。けど俺、何か間違ったことを言っただけかな？」

「間違ったことは言っていないよ。けど、その物言いは気に入らないね」

「・・・ああ、そういうこと。俺が染岡のこと言ったのが許せないんだ！」

一之瀬が楽しそうに言った瞬間、吹雪が動いた。
円堂が持っていたボールを引っつかみ、強引にシュートの体勢に入る。

「やめろ吹雪！」
「吹雪！」

円堂や染岡の罵声が響くが、吹雪には届かなかった。

「ウルフ、レジェンド！」

以前より威力も格段に増した吹雪のシュートは、
一之瀬に向かって真っ直ぐ尾を引いた。

一之瀬は大して驚きもせず、それに対処しようとする。
だが、その前に一つの影が割り込んだ。

「デモンカット！」
「！」

吹雪のウルフレジェンドは簡単に止められ、
放ったボールは割り込んできた第三者の手に収まった。

「あれ、キャプテンどうしたの？」

「どうしたの、じゃないでしょうー一之瀬君。試合前から騒ぎを起こしてどうするんですか？」

しかも、さっきのシュートで怪我でもしていたら・・・」

「あれくらいなら俺だって止められたよ！ヘンクさんてほんと、極度の心配性だよな」

やれやれというように肩を竦ませる一之瀬にため息をつく、ヘンクタッカーは円堂たちに向き直った。

「試合前からのご無礼お許しください。彼は少々考えなしなところが有りますゆえ・・・」

「あ、なんだよヘンクさん！子供扱いしちゃってさ！」

「私から見れば十分子供です」

「あー、はいはい」

拗ねたように、一之瀬は何処かへ歩いていった。

ヘンクはそれを見てもう一度ため息をつく、円堂たちに言った。

「一つ申し上げるとするなら、そうですね。

先ほどのシュート。あんなものでは、我々からゴールは奪えませんよ」

では、とヘンクも何処かへ消えていった。
それを見届けると、円堂は吹雪と染岡に歩み寄った。

「吹雪、染岡、大丈夫か？」

「うん。・・・ごめんキャプテン、ついカツとなっちゃって・・・」

「気にすんなよ。染岡が言ったことも、一之瀬が言ったことも、全部本当のことだから」

「しかし、あの一之瀬があそこまでひねくれているとは思わなかったな・・・」

メンバーたちに不安の波が押し寄せた。
だが、マークは言った。

「相手がどんなに強かろうが、俺たちがやるべきことは一つだ。そうだろ？みんな」

「ああ。俺たちの力を、あいつらに見せてやろう」

「やるぞ、皆！」

『おう！』

「あ、ヘンクさんお帰り！」

ベンチにヘンクが戻ってくると、一之瀬が言った。

ヘンクはため息を一つつくと言った。

「一之瀬君、今後あのようなことは控えてくださいよ?」

「えー? あんなこと言われたら黒歴史掘り返してやりたくないんじゃないか」

「・・・他の趣味を見つけることをお勧めします」

「にしても、アメリカ代表の3人を入れてきたか・・・。少々予想が外れたな?」

チームガルシルドのFW・コヨーテが言った。

その言葉に、何人かが頷く。

「まあ想定内でしょ。あいつらの癖とかは俺も知ってるし」

「さすがだな。アメリカ代表の要と言われただけはあるか」

「まあね」

一之瀬が悪戯っ子のような笑顔をつくっていると、

彼らの傍に、ふいにガルシルドが現れた。

「何があるうとも、君たちの敵ではない。そうだろう? 諸君」

「もちろんですよ、ガルシルド様」

一之瀬はもう一度、楽しそうに笑った。

『底の见えない真つ暗な海に、彼らの光は届くのか？』
『それは誰にも分からない。』

光が強ければ強いほど、闇もまた強くなる

からね

？
眩すぎる光では

フィールドで、再び二つのチームが向かい合った。
ユニコーンの3人を加えたイナズマジャパンのフォーメーションは、

FWに豪炎寺・虎丸・ヒロトのスリートップ、
MFに不動・鬼道・佐久間の帝国組、DFに土門・壁山・吹雪・
風丸、

そして、GKに円堂という形だった。
対するチームガルシルドは、FWに一之瀬を入れていた。

太陽が雲に隠れフィールドに影が落ちる中、試合開始のホイッスルが響いた。

先攻するのはイナズマジャパン。
ヒロトが鬼道にパスを出し、そのまま上がっていく。

その様子を、鈴奈はじっと見つめていた。

「鈴奈さん」

「うん？」

静かに、春奈が彼女に声をかける。

「さっき、一之瀬さんと吹雪さんたちが喧嘩になったとき、
どうして何も言わなかったんですか？」

鈴奈さんの性格なら、何か言いそうなもののなに」

「そうだねえ・・・。」

強いて言うなら、一之瀬君の真意が読めなかったからかな」

「それって、どうしてあっちに行っただか、っていいことですか？」

首をかしげる春奈に、鈴奈はゆるく首を振った。

「ちょっと違うね。私に分からないのは、一之瀬君の今の気持ち。

狂ってるみたいに『演技』してるみたいだけど、

その仮面の裏に何を隠してるのかなあ、って考えてたら、いつの間にか喧嘩が終結してた」

「そ、そうですか・・・。」

やっちゃったよ、と言うように笑う鈴奈に、春奈は愛想笑いを浮かべた。

一方、敵陣に切り込んでいくイナズマジャパン。

鬼道がボールをキープし、そのまま虎丸にパスする。

「よしっ、豪炎寺さん！」

「ああ！」

お互いに頷き合つと、二人はシュートの体勢に入る。

「「タイガーストーム・？2！！」」

蹴りだされたボールは、凄まじい勢いでゴールに迫った。
その時、シュートを放った2人は気づいていなかったが、
鬼道を中心としたメンバーたちは、あり得ない光景を目にしてい
た。

チームガルシルドの選手たちは、誰一人豪炎寺と虎丸を止めよう
としていなかった。

一之瀬にいたっては、そちらを見ることすらしていなかった。

『君と戦いたいんだ、円堂』

一之瀬の唇が、形だけで言葉を紡いだ。

笑みを崩さない一之瀬に、土門は悪寒を覚えた。

その次の瞬間、轟音が響いた。

チームガルシルドのゴール前で、フォクスと呼ばれる銀髪のキ
パーが

がっちりとボールを掴み取っていた。

「なっ、タイガーストームをあんなに容易く！」

「あのキーパーも普通じゃないですよ……！」

目金と春奈が言う。

豪炎寺と虎丸を初めとしたメンバーたちも、驚きを隠せないでい
た。

だが、試合はすぐに再開される。

相手のゴールキック。

今度は、イナズマジャパン全員が身動きを封じられた。

ボールは一瞬で、FWの一之瀬に渡る。

そのままゴールに向かう一之瀬の前に、土門が飛び出した。

「行かせねえ！ボルケイノ——ッ」

「ジャッジスルー」

土門が技を繰り出すよりも早く、一之瀬はボールを土門の腹に叩き込んだ。

その場に崩れ落ちる土門を、一之瀬は抜いていく。

「俺が戦いたいのは円堂なんだ。邪魔するなよ土門！」

振り向きざまにそう言い、一之瀬は再びゴールに向かった。
だが、その前に閃光が滑り込んだ。

「行かせないよ！」

「！吹雪か！」

吹雪と一之瀬が激しく競り合う。

その様は、一匹の狼が不死鳥を仕留めようとしているかのようだ

った。

「だああアッ！」

「そう熱くなるなよ！さしずめ、染岡の敵討ちつてところかな？」
「ッ！」

瞬間的に生まれた吹雪の隙を、一之瀬は見逃さなかった。
ゴールまでの道が、開けた。
円堂は自分の頬を叩くと、体勢を整えた。

「行くよ円堂！」

「来い！」

短いやり取りを交わし、一之瀬はシュートの体勢に入る。
後方宙返りから、強烈なシュートが放たれた。

「真・ペガサスショット！！」

そのシュートに、イナズマジャパンのメンバーは驚愕した。
その威力にだけではない。

以前見たあのシュートは、純白に近いペガサスが翔けていた。
だが、今のはどうだ。

赤黒く染まったペガサスが、ゴールに向かって翔けていた。

「円堂！」

呆然としていた円堂は、鬼道の絶叫で我に返った。

「ッ、いかりのてっつい・V3!!」

魔神の拳と黒いペガサスが激しくぶつかった。

一時は押さえ込めるかと思われた一之瀬のシュートは、円堂の技を軽々と突き破った。

ゴールネットが、揺れた。

ころころと地面に転がるボールを、円堂たちは呆然と見つめていた。

その一方でチームガルシルドのメンバーたちは、それを当然のこととして見ていた。

地面に着地した一之瀬が、挑発するように言った。

「…挨拶がわりだよ」

豪炎寺のセンターキックから、試合が再開される。

彼は周囲を何度か見、鬼道に鋭くパスを出した。

それを受けた鬼道は、さきほどの豪炎寺と同じように周りを見渡した。

ゲームメイクのための周囲確認。

それは当たり前のことであり、彼のチームでの役割だった。

だからこそ、落とし穴。

周囲を見渡した鬼道が視線を前に戻した瞬間、彼の眼前に一之瀬が躍り出た。

とっさに対応しようとする鬼道に、彼は不敵に笑った。

「君の悪い癖だよ鬼道…。周りに気を配るばかりに、自分に甘くなる！」

デモンカット！」

「ッ！」

鬼道からボールを奪った一之瀬は、再びゴールに迫った。

不動、佐久間と軽快に抜いていく一之瀬の前に、銀色の髪を揺らす吹雪が飛び出した。

「スノーエンジェル・改！」

「ッ、やっぱりすごいな君の技は！けど…ッ！」

一之瀬の足元から炎が舞い上がり、吹雪の作り上げた氷山は水蒸気になってしまった。

「頭が熱でやられてるんじゃないかな？技のキレが甘い！」
「くっ……！」

吹雪は悔しさに顔をゆがめた。

それとは対照的な表情で、一之瀬は前線に鮮やかなパスを出した。

「コヨーテさん！」

「ッ、おう！ガンショット！」

鋭いシュートがゴールに迫った。

これを入れられてしまったら、イナズマジャパンは圧倒的に不利な状況になる。

ゴールキーパーとして、キャプテンとして、それは絶対に避けなくてはならない。

円堂はぐつと拳に力を込めると、大きく跳んだ。

「真・イジゲンザハンド……！」

大きく広がった衝撃波に、コヨーテのシュートが激突する。

少しでも気を抜けばゴールを許してしまいそうなほどのシュートに、円堂は叫んだ。

「負・け・る・かあああッ!!」

今にも破られそうになっていたイジゲンザハンドは、ギリギリのところでガンシヨットを弾き飛ばした。

「ふん、ちよつとはやるみたいだな」

『ちよつとは』というコヨーテの言葉に、円堂たちは戦慄した。

「あれで本気じゃないってことかよ!」

「円堂さんですら止めるのに必死だったのに…!」

「こんなやつらに、俺たちは勝てるのか…?」

ベンチにいる綱海・立向井・飛鷹の3人が言った。

秋は、一之瀬のプレーの変わりように言葉を失っていた。

「…でも」

静かに、冬花が口を開く。

「でも、きっと大丈夫です。最後まで諦めない。それが、守くんたちのサッカーだから」

円堂からのゴールキック。

「風丸！」

「おう！」

パスを受けた風丸は、即座にその優れた脚力を発揮した。コヨーテ、スコープオと抜き、あっという間にセンターラインのあたりまで上がっていく。

だが、敵陣にまで切り込ませてくれるほど、相手も甘くなかった。

「行かせないよ！」

「ッ、一之瀬！」

突然飛び出してきた一之瀬に、風丸は思わず立ち止まってしまった。それが命取りだった。

「真・フレイムダンスー！」

「！うわッ！」

「風丸！」

鬼道が叫んだ。

その声も空しく、ボールは一之瀬に奪われる。

「ちッ、ディフェンスもそれなりには出来るってことかよ！」

不動が苛立たしげに言った。

そんな彼などお構いなしに、一之瀬は再び攻め込んできた。

「コヨーテさん！スコープオさん！」

「おう！」

「ああ！」

チームガルシルドの3トップを形成するFWの3人が、同時にボールを蹴り上げた。

曇天を背景に浮かんだボールからどす黒いオーラが飛び出し、何かを形作っていく。

その正体に、円堂たちは再び戦慄した。

それを知らないヒロトや虎丸たちはただ驚いただけだったが、彼らは——特に風丸や染岡は——絶句した。

「……真・ダークフェニックス……！」

翼を黒く染め上げた禍々しい不死鳥が、ゴールに飛翔した。

不死鳥。それは、一之瀬一哉の代名詞だ。

ゴールに迫るそのシュートが今の一之瀬の変化を表しているように、

秋は一筋だけ、誰にも気づかれないように涙を流した。

皆がシュートを食い入るように見つめる中、

それを敏感に感じ取った高宮は、静かに瞳を閉じた。

「真・イジゲンザハンドォ!!」

二つの必殺技が衝突し、激しい突風が巻き起こる。

あの時、数回だけ受けた必殺技。

またこうしてこの技と向かい合うことになる、誰が想像しただろうか。

その心の揺らぎが、円堂の技にそのまま反映されてしまった。

一瞬の均衡の後、黒い不死鳥がゴールに突き刺さった。

「あのエンドーが、こうも簡単に点を取られるなんて…」

ディランが声を震わせて言った。

ベンチに座る彼らだけでなく、

フィールドに立ったメンバーたちも同じ思いを抱いていた。

円堂守というプレイヤーは、イナズマジャパンの柱であり、絶対的な存在だった。

だからこそ、彼が押し負けたという事実が信じられないのだ。

「…円堂、大丈夫か」

ゴール付近まで戻っていた佐久間が言った。

その隣に、風丸が心配そうな面持ちで歩み寄った。

少しの間わなわなと手を震わせていた円堂は、決意したように拳をぐっと握った。

そうして、チームを奮い立たせるあの声を張り上げた。

「まだまだだ！１０点だろうが２０点だろうが、勝負は終わるまでわからない！

行くぞみんな！反撃だッ！！」

『おうッ！！』

少し前の沈んだ面持ちが嘘のように、メンバーたちに活気が戻っていく。

それを見た鬼道と不動は、互いに顔を見合わせ頷き合った。

その様子を見たコヨーテは、感心したような呆れたような声で言った。

「へえ。あつという間に２点差になったっていうのに、中々強気な奴だな」

ほかのメンバーたちも嘲笑するように言ったが、一之瀬だけは違
った。

「さすがだね、それでこそ円堂だ。そういう展開じゃないと、潰す
面白みがない」

「中々キツイ言葉を言いますね一之瀬君…」
「そうかな？」

あの日、初めて会った彼はこんなものではなかった。
人は数日で変わるものだな、と密かに関心したヘンクだっ
た。

自分のポジションに戻りつつ、一之瀬は思考をめぐらせた。

「(さて、ここからが本番だよ円堂…」。

俺の實力は、まだまだこんなもんじゃないんだから…！)」

『彼らの放つ光じゃあ、不死鳥さんの黒は白に変えてあげられない

の？
』

『そうだね。眩すぎる光では、底なしの闇は拭えない。』

白は黒と相反するけれど、同時に一番近い色でもあるのだから
』

？ 闇の鉾の向く先は（前書き）

都合上サブタイトルを変更しました
すみません^^；

？ 闇の鉾の向く先は

得点は2点差。

イナズマジャパンが圧倒的に不利な状況で、試合は再開される。

豪炎寺のセンターキック。

ボールは鬼道に渡り、彼はさっと周囲を確認した。

そのゴーグルには、常に一之瀬が写っていた。

「（先程のディフェンスを見る限り、今の一之瀬はFWからDFまでできる力を持っている。

普通のドリブルではまず抜けられない。ならば……！）不動……！

「はいよォ！」

イナズマジャパンの誇るもう一人の司令塔・不動明王。

二人の司令塔は一之瀬に向かって大きく飛び出した。

「「キラーフィールズ……？2……！」

「ッ！」

さすがにこれは防げなかったのか、鬼道・不動の技は一之瀬を簡単に吹き飛ばした。

一之瀬が体勢を立て直し着地した時には、二人の司令塔は敵陣に深く切り込んでいた。

「さっすがー。けど…」

ひそかに、一之瀬は笑みを浮かべる。

「俺の後ろには、我らがキャプテンがいるのを忘れないでよ？」

鬼道と不動の前に、待ってましたと言わんばかりにヘンクが現れた。

「！」

「バカ野郎！一之瀬に気を取られすぎだ！！」

不動が怒鳴るが、

「遅い！デーモンカット！！」

「しまった！」

衝撃波によってはじき上げられたボールは、ヘンクの足元に収まる。

「みんな戻れえッ！！」

円堂の叫び声によって、前線に向かっていたメンバーたちは一斉に自陣に戻り始める。

一連の攻防を見守っていた綱海は、思わずベンチから立ち上がっていた。

「ちくしょう！あれじゃあ一之瀬を抜いても、すぐに取られちゃうじゃねえか！！」

「けど、あれを超えられなければ点は返せませんよ…！」

立向井も拳を握り締めて言った。
目金や春奈も、相手の突破口をフィールドの外から見つけようと躍起になっていた。

フィールド、ベンチと共に騒然とする中、鈴奈と久遠だけが、静かに腕を組み、フィールドを見つめていた。

「高宮、お前はこの試合で何を企んでいる？」

「企んでるなんて言わないでくださいよ。ちょっとした作戦です」

「…勝利に繋がる確信は？」

「もちろん、ありますよ。けど、それにはまだ早い…。機会を待つつもりですよ」

「中々いい判断だな」

「伊達に鬼瓦さんの助手やってませんよ」

「…そうか」

落ち着いた二人の雰囲気も、次の瞬間には一変することになる。
ヘンクからのパスを受けた一之瀬が、再び攻め込んできたのだ。
その速さは疲れを見せず、軽快にイナズマジャパンのDFを突破
してきている。

「土門、壁山、吹雪！止めるぞ！！」

「ああ！」

「はいッス！」

「おう！」

風丸の号令を受け、DF全員が一斉に一之瀬を止めにかかる。
だが、

「数が多ければ止められるとも思ってた？」

アメリカ戦で見せたような鮮やかなボール捌きで、一之瀬は簡単に
4人を抜いてしまった。

彼の前に立ちはだかるのは、円堂ただ一人。

「まずい！」

「円堂くん！」

「円堂さん！」

センターラインのあたりまで戻っていた豪炎寺たちが叫ぶ。
円堂は大きく深呼吸すると、両手を大きく広げた。

「来い！これ以上は、絶対に入れさせない！！」
「止められるなら止めてみなよ！真・ペガサスショット！！」

黒いペガサスが、再びゴールに迫った。

円堂はフィールドを踏みしめると、渾身の力を拳に注いだ。

「真・イジゲンザハンドツ！！」

二つの技が真っ向からぶつかり合い、凄まじい爆音と砂煙をあたりに撒き散らす。

腕にビリビリと伝わってくる衝撃を感じながら、円堂は無我夢中で叫んだ。

「どおおおおおおりゃあああああああッ！！！！！！」

少しずつ、だが確実に、シュートの軌道が逸れていく。
やがて、一之瀬の放ったボールは円堂の技にはじかれ、ゴールポストの上を飛んでいった。

「よっしゃあ！」

「やったな円堂！」

拳を突き上げる円堂に、佐久間が叫んだ。

「…へえ、もうこのシュートを攻略してきたか。さすが円堂だね」

シュートを止められた一之瀬は、まだ余裕の笑みを浮かべていた。その横顔を、吹雪は鋭く睨んだ。

「油断すんな吹雪！お前の得意技、ガンガン決めてやれ！」

そんな彼に、フィールドの外から染岡の声が飛んだ。その声にはっとし、吹雪は声のした方向を振り返った。視線の先で、染岡がガッツポーズを取った。彼に頷き返し、吹雪はポジションに戻った。

「円堂！」

ゴール前でボールを持った円堂に、不動が合図を出した。

「よし！頼んだぞオ！」

円堂が蹴ったボールを不動が受ける。

「鬼道クン、準備いいか！」

「当たり前だ！行くぞ！」

D Fラインまで下がった鬼道と不動が、同時に叫ぶ。

『必殺タクティクス・デュアルタイフーン！！』

二人の周りに竜巻が起こり、チームガルシルドのメンバーを吹き飛ばしていく。

「ちっ、そうきたか…」

舌打ちしつつも、一之瀬は楽しそうに笑っていた。

一方、二人の司令塔が作り出した竜巻は、センターラインを越え相手のフィールドへ切り込んでいた。ここまでで十分と判断した鬼道は、竜巻を解き大きくボールを蹴り上げた。

「豪炎寺!!」

「おう!」

大きく飛び上がった豪炎寺が、ボールを受け取る。

「させませんよ!」

ヘンクが豪炎寺に迫る。

だが、本来のポジションから大きく飛び出していた吹雪が、彼を抑える。

「「今だ!」」

吹雪と円堂の声に、豪炎寺は大きく頷いた。

虎丸とヒロトが、阿吽の呼吸で彼の両側に走り寄った。

「「「グランドファイア・G2!!」」」

3人に蹴りだされたボールが、紅蓮の炎を吹き出しながらゴールに迫った。

だが、チームガルシルドのキーパー・フォクスは、その炎をものともせず、技を繰り返す。

「ビッグスパイダーV2!!」

黒い蜘蛛が8本の足を広げ、炎を吹き出すシュートに掴み掛かった。

数十秒の攻防の後、ボールはフォクスの腕に収まった。

「くそッ、これでもだめなんて…!」

悔しそくに虎丸が言う。

だが、ヒロトと豪炎寺は違っていた。

「…いや、」

豪炎寺が不敵に笑うと同時に、フォクスの抱えたボールから炎が爆発した。

突然のことに驚いたフォクスは、ボールがゴールに吸い込まれていく様子を呆然と見ていた。

豪炎寺たちのシュートは、死んではいなかったのだ。

「俺たちシュートの勝ちだ!」

ヒロトがガッツポーズをした。

「やりましたよお！一点差です！一点差！！」

ベンチで春奈が飛び上がった。

その隣では秋と冬花がハイタッチし、マークとディランが同時に拳を突き上げた。

「ナイスだぞー！豪炎寺！虎丸！ヒロトー！」

両手をメガホンのようにして円堂が叫ぶ。

センターライン付近では、鬼道と不動がハンドシェイクをしていた。

その光景を少し離れた位置で見ていた一之瀬は、ひっそりと呟いた。

「やるね…。なら、そろそろ俺も本気をだそうかな」

「おっ、アレをやるのか？」

それを聞いていたコヨーテが言った。

彼を振り返った一之瀬の瞳は、爛々と輝いていた。

「もちろんですよ。円堂のために完成させた技ですから」

豪炎寺たちのゴールで1 - 2となってまもなく、試合は再開された。

コヨーテから一之瀬へ、パスが出される。

一点返していたことによって勢いがついていたイナズマジャパンは、

一之瀬からボールを奪おうと彼に迫った。

だが、彼らは忘れてしまっていた。

RHプログラムを受けようと受けまいと、彼が一流のサッカープレイヤーであることに

変わりはないということを。

「そんな単調な攻撃、俺には通じないよ！」

一瞬で、FWの3人が突破される。

続いてMFを軽々と抜かれ、イナズマジャパンに焦りの色が現れ始めた。

「慌てんなみんなあッ!!」

円堂の声にはっとし、壁山が先手を打った。

「行くッスよ！ザ・マウンテン！！」

「甘いよ壁山！」

一之瀬は一度立ち止まりしゃがむと、体をばねのように使って飛び上がった。

その高さは、壁山の技を軽々と超えていた。

「何だと！？」

「一之瀬自身が飛び道具みてえじゃねえか！」

風丸と土門が、一之瀬の跳躍力に唖然として言った。

「さて、行くよ円堂」

「まさか、あの高さからシュートを！？」

吹雪が愕然とした様子で言う。

だが、一之瀬はそれを容易に実現させた。

「君のために編み出した、俺の新しい必殺技だ！ダークトライデン

ト……」

空中から、強烈なボレーシュートが降り注いだ。

先程のペガサスシュートよりも闇に近い色をしたそのシュートは、真・ダークフェニックスと同等、いや、それ以上か。

軌道に闇の花を咲かせながら飛来したそのシュートは、空を裂き、大地さえも砕いて、瞬く間にイナズマジャンパンのゴールに突き刺さった。

「……え？」

てん、てん、ころろ……。

円堂は、瞬きをすることすら忘れてゴールに転がったボールを目で追った。

何だ、今のシュートは。

心臓はバクバクとうるさいほどに動いている。

「キャプテンが、反応できなかった……!？」

「あんな強烈なシュート、俺見たことないよ……!」

飛鷹と木暮がたじろいだ様に言った。

フィールドに立つメンバーたちも同じだった。

誰もが自分の目を疑っていた。

ピッ、ピ……。――

前半終了を知らせるホイッスルが、フィールドに甲高く響いた。それぞれに違う思いを抱えながら、フィールドの選手はそれぞれのベンチに戻っていく。

ゴール前でボールを拾い上げていた円堂に、風丸と壁山が走りよった。

「すみませんキャプテン、止められなかったツス……」

「気にすんな、止められなかった俺の責任だ」

「だが、どうする？」

腕を組んだ風丸に、円堂は黙り込む。

あのシュートを止めるための術が、自分には分らない。^{すべ}後半、あれを止めることが出来るのか。

「……分からない。……けど、やるしかないさ！俺はみんなを信じる！」

方法なんて分からなくていい。ただ、止めようとする思いがあればいい。

円堂の瞳の光が、そう語っていた。

「後半戦、頼んだぞ！」

「ああ！」

「はいッス！」

にっとなつて見せた円堂に、風丸と壁山は力強く頷いた。

自陣のベンチに戻った一之瀬は、水分補給と後半の作戦会議を終えた後、

イナズマジャパンのベンチを瞬きもせずに見つめていた。

「（俺のシュート、円堂はどう思ったかな？きっと驚いたんだろうなあ。

このまま攻めてせめてセメテ10点差くらいにしてみようか。

ああでも、それじゃあ円堂が壊れちゃうかな。

そうだ、ヘンクさんに訊いてみよう。ああ、早く後半にならないかな）」

ひひひっ、という狂気じみた笑い声が、一之瀬の喉から滑り出た。

勝利の女神が微笑むのははたして、太陽か、不死鳥か。

『不死鳥さんの狂気の仮面は、どうしてあんなに分厚いの？』
『行きはよいよい帰りは怖い。』

帰り道無くした彼は、もう戻れないからかもしれな
いね』

？ 仮面に隠した真の思いは（前書き）

何やらシリアスだったりギャグに走ったりするので、
いろいろ展開がおかしいです。
お気をつけください^^；

？ 仮面に隠した真の思いは

ベンチに戻ったイナズマジャパンのメンバーは、休憩の後に久遠のところへ集合した。

「得点は1 - 3。状況としてはこちらが不利だが、分かっているな。この試合必ず勝て」
『はい!!』

全員の返事を受けた久遠は、一度鈴奈に視線を滑らせた。それに気づいた鈴奈は、小さく頷く。

「…では、後半のフォーメーションを伝える。
豪炎寺、宇都宮、基山は臨時でMFに変更する」
『はい!!』

久遠と鈴奈の意図を感じ取りつつ、3人は頷いた。

「そして、FWにマーク・クルーガー、ディラン・キース」
「はい!!」
「Yes!!」

後半からの出番となった彼らは、あれほどのシュートを見たにも

かわらず、

恐れや不安といった負の感情を微塵も感じさせなかった。

ディランに至っては、アイガードの奥に鋭い輝きを放つ瞳さえ見えたほどだった。

「不動、佐久間は下がれ」

「はい」

「おう」

二人は返事をした後に顔を見合わせ、頷き合った。

「そして吹雪。お前は熱くなりすぎだ。下がって頭を冷やせ」

「…はい」

吹雪は俯き、小さく歯噛みした。

「飛鷹、お前は吹雪が抜けたところに入れ」

「うッス」

「残りのものは現状維持。分かったな？」

『はい!』

「デイルン」
「何だい？」

ベンチの前でストレッチをしていたデイルンに、マークが声をかけた。

「カズヤのあの技のことで、少し話がしたいんだ」
「…マークはどう思うんだい？」

柔軟体操をしていた手を止め、デイルンはマークに向き直る。
いつも以上に険しい表情をする相棒に、デイルンはアイガードの奥の瞳を細めた。

「…はつきりとしたことは言えないが、あのシュートから、何か感情みたいなのを感じなかったか？」

「感情…？いや、ミーは特に何も感じなかったけど…。マークは何か感じたのかい？」

「…分からない。けど、あの技が放たれたとき何か感じたんだ…。何か…泣いているような…」

一つ一つ言葉を選びながら話すマークに、デイルンは首をかしげる。

「泣いてる？…カズヤがかい？」

「たぶん…」

そこで会話は途切れ、二人の間に沈黙が広がる。

しばらくした後、ディランは勢いよく立ち上がると、手をぱんつと打ち鳴らした。

「迷つててもどうしようもないさ！

後半、カズヤと直接戦えば、何か分かるんじゃないかな？」

「…そうだな。後半、攻めてくぞディラン！」

「Of course！ギンギンに行こうぜ！」

秋は、一つの決心をした。

前半の間ずっと座っていたベンチから立ち上がると、足早に歩を進める。

その足は、敵陣であるチーム・ガルシルドのベンチに向かっていった。

途中で鈴奈の前を通り過ぎたが、彼女はそれを止めようとはしなかった。

彼女の決心を邪魔する権利は自分にはない、と。そう思ったからだった。

少しの間歩くと、すぐに目的の人物を見つけた。

ベンチから少し離れた場所で、『彼』は存在していた。
拳を強く握り締め、意を決して口を開く。

「…一之瀬君」

自分でも情けないほど、強がっているのが丸見えの、震えた声が出た。

秋に背を向けていた『彼』は、するりと彼女を振り返る。

真紅の双眸が、秋に向けられた。

「…わざわざ敵陣まで遠征かい？秋」

吹雪の時よりは控えめなものの、挑発するような口調で一之瀬は言う。

秋が言葉を選んでいううちに、一之瀬は再び口を開いた。

「何の用？…あ。もしかして、FFの決勝の時みたいに俺たちの秘密でも探りに来たの？」

揺らぐことのない一之瀬の瞳が、秋を容赦なく貫いていく。

以前の彼なら考えられないような言動に、秋は逃げ出しそうになる足を懸命に留めた。

そして、言う。

「…こんなのやめようよ。一之瀬君らしくないわ!」

その言葉に、一之瀬は僅かに眉間にしわを寄せた。
だがすぐに、相手を挑発するような笑みを浮かべる。

「…じゃあ訊くけどさ、俺らしいってどんなこと?」

「えっ?」

「俺らしくないって言うけど、秋は俺らしさを知ってるのか?」

「…それは…」

言葉を濁した秋に、一之瀬は笑みを消した。

無邪気な子供のような口調から一変し、戦場で向かい合った敵に
言い放つような口調になる。

「俺は円堂と戦うためにここにいるんだ。」

邪魔をするって言うのなら、俺は秋にだって容赦しないよ」

初めて向けられた彼の負の感情に、秋の足が自然に震えだす。
だが、ここで逃げ出すわけにはいかない。

「…けど、円堂くんもいつも言ってたじゃない。努力して強くなっ
てこそ意味があるって…!」

「また円堂理論か。君はいつも円堂円堂だ。あいつしか見ていない。…秋は、そんなくだらないことを言い到这里に来たの？」

共に戦ったはずの円堂の言葉を、一之瀬は『くだらない』の一言で切り捨てた。

そのことが、秋に大きな衝撃を与えた。

「…帰ってよ。秋と無駄話するほど、俺も暇じゃない」

「いちの…！」

「秋」

踵を返そうとした一之瀬を秋は引きとめようと手を伸ばしたが、彼はそれを制する。

「しつこいよ。俺は秋のそういうところ、大っ嫌いだ。

…それに、秋に何を言われようが、俺の思いは変わらない」

「…！」

一之瀬はそのまま何処かへ歩いて行ってしまった。

秋が伸ばした手は、そのまま空を切った。

突き放されることに、初めて恐怖した。

『彼』の優しい顔しか見たことがなくて。あんな顔を向けられたのは初めてで。

当たり前が当たり前じゃなくなるときに、こんなに怖い思いをす

るなんて知らなかった。

その場にはもう、彼女しかなかった。

「円堂さん、手、大丈夫ですか？」

キーパーグローブを外して手をさすっていた円堂に、立向井が心配そうに言った。

覗きこまれた彼の手は、小さく震えていた。

「大丈夫だ。心配すんなって！」

「ほんとかよ！こんなにボロボロじゃ説得力ねえぞ！」

「これはもともとだッ！」

綱海に向かつてくわりと目をむいた円堂は、自分の手を見つめた。特訓でかすり傷だらけになっていた手を、ぐっと握り締める。

「…駄目なんだ」

「駄目って…何がだ？」

佐久間がタオルを円堂に手渡しながら言う。

円堂は礼を言うと、汗を拭いてから言った。

「全力のイジゲンザハンドなら、あのダークトライデントって技を止められるかもしれない。」

けど、それじゃ駄目な気がするんだ……」

「そんなこと言ったって、お前の今の最大の必殺技はそれだろ？」

それを出す以外、方法があるって言うのかよ」

「そうだよ！あんなシユート、イジゲンザハンドじゃないと止められないんじゃない？」

腕を組んだ不動と木暮が言う。

彼の言うとおりだった。イジゲンザハンドでなければ、あの技はおそらく止められない。

だが、それでは駄目なのだ。

「根拠も何もないけど、とにかくイジゲンザハンドじゃ駄目なんだ……！」

方法は、土壇場でなんとかする！」

「おっ、言い切ったな！」

綱海が円堂の頭をわしゃわしゃとかき回した。

その手が彼のバンドナに触れ、それが大きくずり下がる。

「わっ、ちょ、やめろよ！」

思わずバンドナに触れた円堂は、はっとした。
そうだ、これだ。

「サンキュー綱海！いいこと思いついたぜ！」
「はあ！？俺何かやったか！？」

円堂は立ち上がると、作戦を立てている途中らしい鬼道のところへ走っていった。

「高宮」
「おーう豪炎寺くん！前半お疲れー」
「ああ」

スポーツドリンクを片手にやって来た彼に、鈴奈はのんきな口調で言った。
ベンチに座っている彼女に豪炎寺は歩み寄ると、少し控えめな声で言った。

「…やるチャンスはあるか」
「もちろん。後半の最後、一度だけね」

「だが、アレは練習で一度も成功していないんだぞ」
「あつれー？豪炎寺くん、もしかしてもう忘れちゃった？」

一見ふざけているようにも見える鈴奈の態度だが、豪炎寺ははつとした。

「練習の時には無かった思いが、今の君たちにはあるでしょ？」
「…そうだったな」

表情を和らげ、豪炎寺は続ける。

「それで、このことはみんなには言っているのか？」
「えーっと…、あ。円堂君にだけ言っていない」
「何でよりによって円堂に言っていないんだ！」
「うん。言おうと思ったたら円堂君、どっかに行っちゃうんだもん」
「…俺は責任を負わないぞ」
「お。任せろ」

後半開始前に胃痛の原因を一つ作ってしまった豪炎寺だった。

後半開始直前、鈴奈はフィールドに出る１１人の選手たちを集め

た。

「みんな、前半お疲れ様。そして、これから後半を戦うわけだけど…、

その前に聞いてほしいことがあるんだ」
「何だ？」

鬼道が言った。

「前半はみんな、一之瀬君の外側しか見てなかったよね？
後半は、内側を見ることを意識してみて」

「内側？…どういうことッスか？」

壁山が首をかしげた。

「簡単に言うと、一之瀬君の思いを感じてほしいんだ。
挑発してくるみたいな態度に隠れがちだけど、

一之瀬君がああなったのには、絶対に大きな理由がある」

「俺が、円堂みたいに強くなりたいって思ったのと同じ感じか？」

「うん。思いは違っただろうけどね」

風丸に頷き、鈴奈は言った。

そして、彼女の隣に秋が歩み寄った。

「…みんな、頑張つてね！」
『おう！』

彼女の言葉に、全員が威勢のいい声を返した。

フォーメーションを展開していく選手たちをベンチから見ながら、
鈴奈は秋に声をかけた。

「秋ちゃん」

「…何ですか？」

「さつき、何かあった？」

「…！」

秋の肩が揺れる。

…凶星か。分かりやすいにも程がある。

「その様子だと、一之瀬君にキツイこと言われた感じだね？」

「…聴いてたんですか？」

「いや？あなたの雰囲気で、そうかなあって思っで」

「そうですか…」

その言葉から、沈黙が流れる。

段々と気まずい雰囲気になるのに絶えかねて、鈴奈が口を開こうとしたときだった。

「…初めてだったんです」

「…何が？」

俯いたまま、秋は続ける。

「あんなに怖い顔されたのも、嫌いだって言われたことも…」

「…怖いんです。また否定させることが…ッ！」

最後の言葉は、嗚咽が混ざって少し聞き取りづらかった。

あーあ、女の子泣かせてやんの。

戻ってきたら鉄拳制裁決定だ、あのアメリカンめ。

そうだ、マーク君にも頼んでおこうか。彼も説教とか手馴れてそうだし。

そんなことを頭の中でぐるぐると考えていた鈴奈は、おもむろに口を開いた。

「…それは、一之瀬君がずっと、秋ちゃんに対して思ってたことじゃないかな。」

けど、いつもは負の感情より正の感情のほうが勝って、それが出てこなかっただけ。

こっという状況だからこそ、その思いが全部溢れてきたんじゃない？」

「…そう、なんでしょうか…」

「初めてだったんならショックを受けても仕方ないけど…」

けど、きっちり受け止めてあげなきゃ駄目だよ。

彼がそう言ったってことは、あなたもそう思われるくらいのはしてたってことなんだから」

「…！」

思い当たる節があったのか、秋は俯けていた顔をバツと上げた。瞳が涙で潤んでいる。

鈴奈はポシェットからハンカチを取り出すと、秋に渡した。そして、フィールドに視線を移す。

「…信じよう、みんなをさ」

運命の後半戦が、幕を開ける。

『不死鳥さんは、どうして本当の気持ちを太陽さんに隠しているの？』

『太陽さんは眩しすぎて、不死鳥さんの思いは焼かれて消えてしまっ
うからだよ。』

太陽さんが気づくまで、不死鳥さんは仮面の裏で叫
び続けるんだ』

？
仮面に隠した真の思いは（後書き）

今回は見事にギャグとシリアスが混ざった展開となりましたハイ
^；

最初は豪さんと鈴奈さんの会話もシリアスだったんですけど・・・
どうしてこうなった（^o^）ノ

とりあえず、原作ののせさんは秋ちゃんに結構甘いので、
思いつきり冷たくしていただきました。
後にはもれなく正義の鉄拳です^^

？ 稲妻纏いし少年の（前書き）

書きたいこといっぱい書いてたら、
スツゲーマジで長くなつた！
すいまつせえええええん！！
ほんとごめんなさい！

？ 稲妻纏いし少年の

後半開始のホイッスルが響き、チームガルシルドのキックからボールがフィールドに舞った。

一之瀬からのパスを受けたスコーピオが、敵陣へ突進する。だが、FWのマーク・デイルンは、それと対称的に前へ走り出した。

「ふっ、敵前逃亡か？」

「そんな訳ねえだろ！」

スコーピオの前に、土門が飛び出した。その勢いのまま、大きく足を振り切る。

「ボルケイノカットV3ッ！！」

「！くッ」

地面から突き上げた衝撃波が、ボールを弾き飛ばす。

だが、ボールは土門の足元に収まらず、空中に舞ってしまう。

「はッ、コントロールの無い奴だな！」

「…そうか？」

にやりと、土門はほくそ笑んだ。
それに続くように、フィールドを力強く蹴る音。

「ナイスだ土門！」

空中に飛び上がった風丸が、土門からのボールを見事に受け止めていた。

それを確認した鬼道が叫んだ。

「今だ！必殺タクティクス・ルートオブスカイ！！」

『おう！』

「行くぞ壁山ア！」

「はいッス！」

空中で体勢を整えた風丸が、体をひねって壁山にパスを出す。

それをさらに空中で受け止めた壁山だったが、その目の前に一之瀬が現れた。

ルートオブスカイの対処法をいち早く察知し、彼の前に飛び上がったのだ。

「この程度の高さ、俺が追いつけないとも思った？」

「思っていないッスよ！」

「？」

その言葉に一之瀬は眉をひそめた。
だが、壁山がボールをさらに上に蹴り上げたのを見て、驚きに目を見開いた。

「頼むツス飛鷹さん！」
「おうッ！」

ボールを蹴った反動のまま体を反らした壁山の腹を借りて、飛鷹が空中に舞った。

壁山の高さまでしか跳んでいなかった一之瀬は、当然、彼を追うことが出来ない。

「うまい！」
「飛鷹の奴、やるじゃねえか！」
「行ける、行けますよ！」

立向井・綱海・目金がベンチから身を乗り出して言う。

「虎丸ッ！」
「はい！」

飛鷹が蹴り落としたボールを、虎丸が受けた。

そのままドリブルで上がりつつ、前方に二人がいることを再確認する。

よし、とつぶやくと、虎丸は高くボールを蹴った。

「マークさん！ディランさん！」

「ああ！」

「OK！」

予想外の事態に反応が遅れたチームガルシルドのDFたちは、二人の息を乱すことが出来なかった。

息を合わせたマークとディランが、同時に飛び上がる。

ボールは、吸い込まれるように二人の間へ。

「真・ユニコーンブーストッ！！」

同時に蹴られたボールは、ゴールに向かって真っ直ぐに飛んだ。一角獣の角が、日光が無いのにも関わらず、キラキラと煌いている。

キーパーのフォクスが、大きく腕を広げた。

「ビッグスパイダーV2！！」

一角獣の角と蜘蛛の足が激突した。

一角獣は蜘蛛を角で貫かんとし、蜘蛛は一角獣をその足で絡めとろうとする。

びしり、バキッ。

ヒビが入ったのは、蜘蛛のほうだった。

邪魔者を排除した一角獣は、そのままゴールに突進した。

ピ——！

ゴールを知らせるホイッスルの音が響いた。

「ヒヤッホウ！やったねマーク！」

「ああ、ディランもナイスだった！トラマルのセンタリングも最高だったぞ！」

「はいッ！ありがとうございます！」

虎丸は満面の笑みでマークに言った。

「いいぞみんなア！」

円堂がゴール前から叫んだ。

それを遠目に見つめる一之瀬に、コヨーテが言う。

「どうする、一点差だ」

対する一之瀬は、すい、と彼に視線を向ける。

「アレ、やりますか？」

「…なるほどな。目には目を、か」

「そっつい感じで」

短いやり取りを終えると、二人はポジションに戻った。

得点は2 - 3。勢いに乗るイナズマジャパンに、相手はどう仕掛けてくるのか。

そんな緊張が張り詰める中での、センターキック。

試合が再開されると同時に、スコピオはボールを一之瀬に渡した。

そして一之瀬は、ちらりとヘンクを振り返った。

それに頷いたヘンクは、右手を天にかざした。

「行きますよ…！必殺タクティクス・エンペラーロード…！」

ヘンクの宣言と同時に、チームガルシルドのキーパー以外全員が動いた。

瞬く間にイナズマジャパンのフィールドへ進攻すると、彼らを押さえ込み、ゴールまでの道を開ける。

その道を進む皇帝は、言うまでもないだろう。

姿が霞むほどの速度で一之瀬がゴールに迫る。

「ッ、来るぞ！」

DFたちは何とか一之瀬を止めようとするものの、他の選手に抑えられて前に出ることができないでいた。

その間に一之瀬は、円堂の目の前にまで達していた。

「行くよ！ダークトライデント・改ッ！！」

前半最後に放たれたものよりも威力が増した技が、円堂とゴールに迫る。

円堂は一瞬ためらった後、強くフィールドを蹴った。

「真・イジゲンザハンドッ！！」

巻き上がった衝撃波が、一之瀬の技を強引に押さえつける。
ギヤリギヤリギヤリッ！

という何かが削られるような音を聞きながら、円堂は必死に踏ん張った。

「入れさせねえええエエッ！！」

円堂の気合に応えるように、衝撃波がその激しさを増した。

数秒後、円堂の技は、一之瀬の技を紙一重のところで弾き飛ばした。

だがそれで、円堂は確信した。

「（やっぱりだ。やっぱり、あれしかない！）」

円堂のゴールキック。

「円堂、こっちだ！」

「おう！」

風丸へのパスが通る。

前線に目をやると、鬼道が彼に向かって叫んだ。

「行け、風丸！」

「ああ！」

イナズマジャパンが誇る俊足のDF。

隣を抜かれた一之瀬は、小さく舌打ちした。

彼が前に出るということは、狙うシュートは、おそらく。

脳裏をよぎったのは、テレビで放送されていたアジア予選決勝の光景だった。

センターラインあたりまで上がった風丸は、大きく叫んだ。

「壁山、行くぞ！」

「はいッス！」

風丸と壁山が同時に飛び上がる。

やはり。

確信した一之瀬は、二人の間に飛び上がった。

同じ高さになった風丸と、真っ向から視線をぶつける。

「たつまきおとしなら、やらせないよ！」

「…フッ、かかったな！」

普段隠れている左目を覗かせながら、風丸が言う。

その言葉に、自分のすぐ後ろにいる壁山を振り返り、歯噛みする。

壁山は、まだ体を反らしていなかった。

彼らが放とうとしていたシュートがたつまきおとしなら、

壁山はすでに体勢を整えているはず。

だが、それは記憶にある体勢とは明らかに違っていた。

「円堂、豪炎寺!!」

「!？」

風丸が叫んだ名前に驚いたのは僅か一瞬。次の瞬間、一之瀬は自分の目を疑った。

風丸の背後からは豪炎寺が、壁山の背後からは円堂が飛び出した。二人は壁山の腹を使って、さらに上へ。

隣で啞然としている一之瀬を見て内心ガッツポーズをしつつ、自分と同じように落下していたボールを、風丸は上へ蹴り上げた。

「やってやれッ!!」

思いをのせたボールは、円堂と豪炎寺によって渾身のシュートへと変化する。

「イナズマー号おとしV3ッ!」

青い稲妻をフィールドに疾^{はし}らせるそのシュートは、
まるで彗星のような輝きを放ちながらゴールへと向かった。

ここまできて、一之瀬は初めて焦りという感情を見せた。

「ッ、ヘンクさん!」

「分かってます!」

電撃が飛び散るシュートの前に、ヘンクが立ち塞がった。
勢いをつけ、技を繰り出す。

「デモンカットV3!」

黒い衝撃波が地面から伸び、円堂と豪炎寺のシュートと衝突した。

雷鳴が低くうなる。

それは次第に、イナズマジヤパン全員の絶叫に変わっていた。

『行っけえええええええッ!!!!!』

「ッ!くッ!」

ヘンクの技を突き破ったシュートは、彼をも弾き飛ばし、ゴール前にいたフォクスさえも巻き込んで、そのままゴールに突き刺さった。

雷鳴が収まり、フィールドは静寂に包まれた。

チームガルシルドのゴールに転がったボールを誰もが呆然と見つめる中、

冬花が静かに、それでも驚きを隠せないように言った。

「…入った」

その言葉が、チームに伝染していく。

「入った、入りましたよお!!」

「これで同点だな!」

「あれは…あの時の…!」

春奈がぴよんぴよんと飛び回りながら秋に抱きつき、土方と佐久間が言った。

ゴールを決めた円堂と豪炎寺に、鬼道が言った。

「うまくいったな」

「ああ。一か八かの策だったかな」

「けどすげえよ！さすが鬼道だ！」

そう。

後半が始まる前、彼はこう言ったのだ。

『一之瀬はおそらく、こちらの手の内を全て知っている。

だが、FF地区予選決勝でしか使用しなかったあの技なら、行けるかもしれない。

吹雪が下がった今、ジ・アースは来ないと思っているはず。今がチャンスだ』

円堂と豪炎寺が笑顔でいる中、鬼道が真剣な顔になって言った。

「…だが、油断するなよ。」

この試合展開、以前にも似たようなものがあっただろう」

「…あの時の…ダークエンペラーズとの試合のときか」

「ああ…。次にシュートを打たれるとしたら、とんでもないものが来るかもしれない」

冷静に状況を分析する鬼道と豪炎寺に、円堂はへへっと笑った。

「大丈夫さ！それに、高宮が言ってたことも分かってきたし」

「一之瀬の思いを感じろ、ってやつか？」

「ああ！あいつなら、絶対シュートを打ってくる。勝負はそのときだ！」

前向きな表情を見せる円堂に、鬼道と豪炎寺は顔を見合わせて苦笑した。

「後半もあとちょっとだ。逆転の一発、頼んだぞ！」

「ああ！」

「もちろんだ！」

二人が頷くのを見て、円堂はゴール前に戻っていった。それを目で追いつつ、豪炎寺は。

「…しまった」

「どうした？」

「あの技のことを、伝えるのを忘れていた」

「…もう手遅れだ。ポジションに戻るぞ」

普段寡黙であることが災いした豪炎寺だった。

試合再開のホイッスルが鳴り響く。

スコーピオからのパスを受け、一之瀬が前に飛び出した。

前衛のマークとディランを抜き、一之瀬は走る。

「（何が何でも入れる！この試合、俺は勝たなくちゃいけないんだ！）」

いつの間にか『願い』が変わっていたことに、一之瀬は気付かない。

狂った時計の針は、もう前には進まない。

その瞳に映るのは、円堂ただ一人。

「ボルケイノカットV3！！」

「しんくうまV2！！」

土門と飛鷹による強烈なブロックを強引に突破し、前へ進む。

その様子をベンチから見ながら、鈴奈は呟いた。

「…気付いてるね、円堂くん」

それを耳にした秋が、鈴奈を振り返る。

視線を一之瀬に固定したまま、彼女は言う。

「この試合、ただ勝つだけじゃあ、何も解決しない。力だけじゃ、どうにもならない。」

歪んだまま廻る歯車を、君は元に戻すことができる？」

鈴奈の視線が円堂に移る。

ゴールの前に立ち塞がる彼は、歯を食いしばり、真っ直ぐ一之瀬を見据えていた。

一之瀬が、空に舞った。

「真・ダークトライデントッ！！」

それまでの2本のシュートとは、比較するまでもなかった。闇の塊のようなシュートが、円堂に迫る。

「円堂ッ！」

聞こえた声は、一之瀬だろうか。はたまた、自分を心配してくれた風丸の声だろうか。

それすら判断できないほど、円堂は迫り来るシュートに全神経を注いでいた。

——ここだ。

「真・ゴツドハンド！……！」

極彩色の光を放つ金色こんじきの神の手が、フィールドに現れた。

声を聞いた気がした。

泣いているようで、助けを求めているいるようで。
消え入りそうな声を、必死で追いかけた。

痛いよ

苦しいよ

悲しいよ

寂しいよ

一人にしないで

つら

いよ

ねえ

怖いよ

気

付いてよ

(俺はイツまで叫べばいい?)

『太陽さんの思いは、どうしてあんなに綺麗なの?』
『みんなを照らしてあげたいからだよ。けれど、』

その思いだけでは、不死鳥さんは救えない』

？ 稲妻纏いし少年の（後書き）

最後のほう、完全にパソコン向けの書き方でごめんなさい……
なんだかなー。

豪炎寺がギャグ要員でしかなくなってきた。

この小説、シリアスなはずなんだっただけどなあ…

？ 彼の者思いし心の強さは

「真・ゴッドハンド！！！」

「なッ！？」

一之瀬は空中で目を見開いた。
いや、彼だけではない。

フィールドに立つメンバーたちも、驚きを隠せないでいた。

「正気か円堂！イジゲンザハンドでやっとなめられたシュートだぞ
！？」

風丸が叫ぶが、円堂が答える前に二つの技がぶつかり合った。
その衝撃で、激しい突風が巻き起こる。

じり、と、円堂が一步退いた。

少しずつ押され始める円堂に、一之瀬が叫んだ。

「俺をなめてるのか円堂！俺は君と、本気の勝負がしたいんだよ！
！」

「俺はいつだって本気だ！このシュートは、何があっても入れさせ
ない！！！」

円堂の気迫に、一之瀬がひるむ。

目の前で激しい火花を散らす黄金の光を見つめ、円堂はありったけの声で吼えた。

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおッ！！！！！！！！」

凄まじい爆発が起こり、フィールドは砂塵に包まれた。

ゆっくりと、砂の霧が晴れていく。

誰もが固唾を吞んでイナズマジヤパンのゴールを見つめていた。

ゴール前には、右手でしっかりとボールを掴んだ円堂の姿があった。

「っっしゃあ！さすが円堂だぜ！」

綱海がガッツポーズをする。

少し離れたところでは、鈴奈が静かに微笑んでいた。

ゴール前で、一之瀬は驚愕の表情を浮かべていた。

「俺の全力のシュートが、止められた…!？」

信じられない、というように呟く一之瀬に、ボールを抱えた円堂はにかつと笑った。

「お前のシュートを初めて止めたときも、ゴッドハンドだったんだ」
「…!」

一之瀬の表情がさつと凍りついた。
一瞬驚いたように目を見開いたが、すぐに唇を引き結ぶと、円堂を睨み付けた。

円堂に続いて飛鷹が声を張り上げた。

「俺は、あんたのことはほとんど何も知らない。
それでも、俺にだって分かる。あんたが闇に染まるような人じゃないってことくらい!」

その様子を遠巻きに見守っていた鈴奈は、ふつと微笑んだ。

「飛鷹!」

飛鷹に円堂からのパスが通り、彼はそれを壁山に送る。
さらにそのボールは、壁山からのパスによって風丸に渡った。

ゴール前を飛び出した一之瀬が、風丸に迫る。
風丸は、貫くような視線を放つ深紅の双眸に向けて、不敵な笑みを浮かべた。

「悪いな一之瀬。今度は俺が勝たせてもらうぞ！風神の舞・改！！」
「！くッ……」

一之瀬を抜いた風丸は、土門にパスを出した。

それを一度足で止め、自分の背後にいる一之瀬に、顔を背けたまま言った。

「お前はいつつも、独りで悩みすぎなんだよ！
そんなに俺たちは柔か！？頼りねえか！？全部受け止めるのが仲間ってもんだろぅが！

自分に素直になりやがれ！」
「……！」

一之瀬の瞳が僅かに揺れた。

土門は一通り叫んだ後、足を振り上げた。

「鬼道！」
「ああ！」

パスを受けた鬼道は、一気に速度を上げて敵陣に切り込んだ。
そこに、一之瀬が追いつく。

「デーモン…ッ！」
「真・イリュージョンボール！」

一之瀬が技を出すよりも早く、ボールの周りに虚像が浮かび上がる。
判断が遅れた一之瀬を抜きながら、鬼道は叫んだ。

「俺たちは一つなんだ。お前を闇から引きずり出すってことだな！」
「！」
「豪炎寺！」

豪炎寺にパスが通る。
前にはまだチームガルシルドのDFが構えている。
豪炎寺が心の中で決断したのと同時に、鈴奈がベンチから勢いよく立ち上がった。

「今だ！」

時は、数日前に遡る。

鈴奈に集められた5人は、それぞれの顔に疑問符を浮かべていた。

「高宮が編み出した、」

「必殺技、ですか？」

豪炎寺と虎丸が首をかしげる。

ヒロト、ディラン、マークも、同じような仕草をしていた。

彼らを一度見渡してから、鈴奈は微笑んだ。

「うん。私が編み出した技なんだけど、威力が強すぎる困った子なんだよ。」

私も試しに打って、えらい目に遭った……んだけど、
「ミィたちなら、ってことかい？」

ディランの顔をまっすぐに見つめ、鈴奈はこくりと頷く。
が、その後に苦い表情を作った。

自分の額をしっかりと指で小突きながら、心底困ったような口調で言葉を綴る。

「危険が在るか無いかって言われたらあるんだけど…。
まあ、さほど鍛えてない私と普段から鍛えてる君たちを比べるのがまず間違ってるわけだし…。
そうでもない、こっちは手は全部一之瀬君にバレてるわけだし…」

鈴奈の前に立つ5人は、一度顔を見合わせた。
彼女がこれほど悩んでいるのは、珍しい気がする。

未だにああだこうだと一人で呟いている鈴奈に、マークが晴れた日のような笑顔を作った。

「ま、カズヤのためなら腕や脚の一本や二本、くれてやるさ」
「おっ、マークくんかっこいいこと言うね」

ヒロトが横から小突くと、彼は爽やかな笑顔のまま言い放った。

「Hahaha、あいつに振り回されるのは慣れてるからな」
「ジャパンに行ったときなんか、思い出したくもないネ」

事情を知らないヒロトと虎丸は首を傾げたが、
当時のことを思い出した豪炎寺は、あああれか、と苦笑した。

「鈴奈さん、俺たちやりますよ。少しの危険くらいどうってことないです！」

その必殺技のこと、教えてください！」

虎丸が目を輝かせると、鈴奈は何かの封印を解くように口を開いた。

「…名前は、ディサイアブラストって言うんだ」

「凄い名前だね…。どんな技なんだい？」

「形はないよ」

「ええ！？」

ヒロトの言葉をさらりと返した鈴奈に、虎丸が声を上げた。

だが、彼女の瞳によぎる鋭い光が、冗談ではないことを物語っていた。

「この技はその名の通り、思いをぶつけるためのシュート技なんだ。思いなんて、十人十色でしょ？」

それと同じで、この技も人によって形は様々なんだ。

加えて、打つ時には脚に大きな負担がかかる。

威力は高いけど危険が伴う…。ハイリスク・ハイリターンってやつだね」

「だが、この人数だ。5人で負担を軽減させようって作戦だろう？」

「あ、分かつちゃった？」

悪戯がばれた子供のような笑顔を浮かべる鈴奈に、5人は表情を和らげた。

「このメンバーなら、打ち方は一つだよね」

「ですね！」

「Hooo！そうと決まれば早速練習しよう！」

「ああ！」

ボールを手に走っていく彼らを一人、豪炎寺は鈴奈の元に残って見つめていた。

「…行かないの？」

「…これが完成しなかったら、どうなる」

「うん？」

珍しくマイナス思考の彼に、鈴奈は腕を組んだ。

「らしくないよ、イナズマジャンパンのエースストライカー君？

それに、完成できるかできないかなんて、私が分からないとも思ってる？」

その言葉に、豪炎寺ははっとした。

振り返ると、鈴奈は笑っていた。吹いてくる風に髪を手で押さえながら、彼女は言った。

「勝率の無い賭けは、しない趣味なんだ」

その笑みが、全てを語っていた。

鬼道からパスを受けた豪炎寺は、ちらりと後ろを見た。
視界の隅に一之瀬を捉える。

彼が自分に追いつけば、シュートは打てない。

高宮の言つとおり、打つのは今しかない。

「行くぞ、皆！」

『おう！』

彼の号令に応え、前線の5人が陣形を整えていく。

ヒロトと虎丸が豪炎寺の両隣に並び、マークとディランが前に出る。

「よく見ておけよ一之瀬！」

「これがミーたちの、」

「思いだ！」

豪炎寺・ヒロト・虎丸によって蹴りだされた焰の噴き出すボールに、

マークとディランが合わせる。

『ディサイアブラスト!!』

あれだけ練習して一度も成功しなかった技が、彼らの目の前で彗星のように光の尾を引いた。

そのシュートはチームガルシルドのDFに止まらず、GKのフォクスさえ弾き飛ばしてゴールに迫った。

そのままゴールを揺らすのかと思われた矢先、シュートの軌道上に一之瀬が踊りこんだ。

「絶対に入れさせない！俺は、負けられないんだッ!!」

彼の背後から、どす黒いオーラが溢れ出した。

背筋が凍るようなそれに、秋が口元を手で覆った。

鈴奈はそんな彼女の肩を、静かに抱き寄せた。

大丈夫。彼らなら、きつと。

「デモンカットV3!!」

悪魔の顔をした衝撃波が、彗星のようなシュートと激突する。

接触し、しのぎを削り合う。

押されも退きもしない。

「まさか、あれで互角なのか？」

鬼道が呆然と呟く。

豪炎寺たちの渾身のシュートが、たった一人の技によって互角にされてしまうのか。

ゴール前からそれを見ていた円堂は、勢いをつけてその場を飛び出した。

驚いて自分を振り返る風丸や土門を視界の隅に捉えながら、円堂は走った。

そして、ゴール前の光に向かって足をしならせた。

ドンツ、という鈍い音が響く。円堂がボールを蹴りつけた音だ。

目の前で爆ぜる光の粒子を全身に受けながら、彼は絶叫した。

「行っけええええええええええッ！！！」

「ッ！」

ぐわり、とシュートの光が激しさを増した。
その光に、悪魔が押され始める。

「!…くッ、うわッ!」

ディサイアブラストがデーモンカットを突き破り、ゴールに突き刺さった。

それと同時に、勝利を告げる笛の音が響き渡った。

「やった!」

「やりましたねっ!」

冬花と春奈がベンチで抱き合う。

フィールドにいる選手たちも、それぞれに歓喜していた。

イナズマジャパンの喜びがその場を埋め尽くす中、

円堂はゴール前に倒れていた一之瀬に向かい合った。

「…円堂」

「へへっ、いい試合だったな!」

その言葉に、一之瀬は目を大きく見開いた。

自分の中の負の感情が、一気に浄化されていくような気がした。

円堂は、にっと笑いながら手を真っ直ぐに差し伸べた。
一之瀬はゆつくりと立ち上がると、彼に手を伸ばした。

…だが、その手は繋がれなかった。

フィールドに何かが崩れ落ちる音が、虚ろに響く。

秋の鋭い悲鳴が、誰かの名を叫んだ。

『不死鳥さんを思う心の強さは、どんな奇跡を呼んだの？』
『彼を救うための希望^{ひかり}を呼んだんだよ。』

けど、誘^{こゝろな}いの悪魔が消えたわ

じゃない』

??

千切れて消えた絆の糸は（前書き）

急いで書き上げたので、大きく書き換えするかもです。

またしても長くなってしまい、すいません。

?? 千切れて消えた絆の糸は

円堂は手を差し出した格好のまま、凍りついたように動けなくな
った。

目の前の光景がやけにゆっくりと知覚される。

茶色の髪が地面に落ちていくのは、何処か別の空間を見ているよ
うに現実味が無かった。

どさり、という鈍い音が響く。

数瞬遅れて、秋の悲鳴が上がった。

「一之瀬君ッ!!」

その声と無数の足音が、円堂を現実呼び戻した。
目の前には一之瀬が倒れている。

駆け寄ってきた土門に助け起こされた彼は、歯を食いしばり、苦
しそうに肩で息をしていた。

無意識下での行動なのだろう。

土門の腕を握った手は、力がこもり過ぎて白くなっている。

段々と白くなっていくのが分かるその顔に、円堂は背筋が凍るの
を感じた。

「一之瀬、しっかりしろよ、一之瀬!!」

必死に呼びかけるが、彼からの返答はない。

誰もが平静を失いつつあったその時、激しい怒号がその場を貫いた。

「ガルシルドッ！！」

あまりの口調の激しさに、全員が声の主を振り返った。

その先には、般若と形容するのが相応しいと言わざるを得ないような表情をした鈴奈が、

拳を握り締めて仁王立ちしていた。

髪は風に煽られ軽く逆立ち、彼女の表情をさらに際立たせている。

驚くメンバーたちを尻目に、鈴奈はつかつかとガルシルドに歩み寄る。

ベンチの傍に立っていた彼の隣には、いつの間にかヘンクが控えていた。

「あんだ、一之瀬君に何したんだ！」

「…それはどういう意味かね？」

モノクルの奥の瞳を細めるガルシルドに、鈴奈は怒鳴りつけた。

「しらばっくれてんじゃないよ！ たった今、何したかって訊いてるんだッ！」

未だかつて無いほどの怒りをあらわにする彼女に、その場が静まり返った。

だが、それを受け流しているかのように、ガルシルドは淡々と答える。

「何、ただの自己破壊プログラムを起動させただけだ」

「…それは、一之瀬君に『例のプログラム』を施したって捉えていいわけ？」

「ふん。だが、たった今その証拠は消え失せた。

こちらとしてはいいデータを取れたよ。…まあ所詮、失敗作にしかならなかったがな」

一度静まったかと思われた鈴奈の瞳に、再び怒りの焰が燃え上がった。

彼女のみならず、ガルシルドの言葉に何人もが口を挟もうとしたが、

相手はそれを自分の言葉で遮った。

「勘違いしてくれるなよ？ 力を求めたのは、あくまでそやつだ」

すい、と視線を一之瀬に移したガルシルドに、マークが吼えた。

「ふざけるな！カズヤの弱みにつけこんだんじゃないかッ！」

「だが、お前はそれに気がつけなかった」

「……！」

にやりと笑うガルシルドに、マークはぐつと唇を噛んだ。

メンバーたちがガルシルドに敵意を剥き出しにする中、鈴奈が冷徹な笑みを浮かべた。

先程までの焰から一転、絶対零度の嵐が吹き荒れる。

「そんなごたくに興味は無いね。」

私は、あんたを鉄格子の向こうにぶち込められれば、それでいい」

そう言っ、て、彼女は自分のポシエツトから小さな機械を取り出した。

かちり、という音と共に、小さな雑音が漏れ始めた。

それはやがて、静かな怒りを秘めた、誰かの声に変わっていく。

「……それは、一之瀬君に「例のプログラム」を施したって捉えていいわけ？」

「ふん。だが、たった今その証拠は消え失せた。」

こちらとしてはいいデータを取れたよ。…まあ所詮、失敗作にしかならなかったがな』

ガルシルドが、僅かに眉をひそめた。

鈴奈は淡々とした口調で続ける。

「あんたが言うとおり、一之瀬君の体には証拠は残ってないだろうね。

けど、ここに記録されてるたった今の会話が証拠だ。

…おっと、これを壊しても意味無いのはわかってるよね？

ここにいる人全員があんたの悪事を証明できるんだから。

…これが、あんたを逮捕するために私が用意した布石だ」

「…その程度のことを証拠と呼べるのかね？」

「あら、私がそんなに用心深くないように見える？」

さらりと言い放つと、鈴奈は腕時計を見、「そろそろかな…」と呟いた。

その時、どこからか足音が響いてきた。

「待たせたなあ、お前ら」

「鬼瓦さんっ！」

円堂が驚きを含んだ笑顔をつくる。

ひげを生やした顔を、鬼瓦は一瞬だけ綻ばせた。

だが、その視線が一之瀬に移った途端、その目に無慈悲の光がと

もる。

ガルシルドに向き直り、鬼瓦は右手を前に突き出した。その手には、何かの紙束が握られている。

「この書類が見えるな？あんたがここで高みの見物をしている間に、屋敷に入らせてもらった。

あんたがやってきたことからやろうとしてることまで、全部調べさせてもらったよ。

高宮のレコーダーに記録されたあんたの声と、この紙の束が決定的な証拠だ。

大人しく、お縄についたほうが身のためだぜ」

「ふん、いいだろう」

鬼瓦がコートの内側から、黒光りする手錠を取り出した。

が、鈴奈が彼の手から手錠を一瞬でひったくる。

そのまま、荒々しい手つきでガルシルドの両手にそれをはめた。

鬼瓦はその光景に目をむいたが、さすがはベテランの刑事だ。

落ち着いてガルシルドを連行していく。

だがその途中、思い出したように鈴奈を振り返った。

「おう高宮、お前後で説教な」

「えっ」

ガルシルドの背中を睨みつけていた鈴奈は、突然鬼瓦から言われ、

素っ頓狂な声を上げた。

固まる鈴奈に、鬼瓦はため息をつく。

「熱くなりすぎ」

「うっ」

「叫びすぎ」

「ぎっ」

「如何なるときでも冷静にあれ。俺の教えたこと、忘れたか」

「…忘れてませんよ」

「なら、説教決定だな」

「…はい」

小さくなる鈴奈を背に、鬼瓦は颯爽と去っていった。

鬼瓦がガルシルドを連行していったから少したった頃、一之瀬が小さく声をもらした。

「…う」

「一之瀬君！」

その声を聞き逃さなかった秋が叫ぶ。

うつすらと目を開けた一之瀬は、目の焦点が合わないのか、ぼん

やりと視線を彷徨わせていた。

やがて一之瀬は、自分の目の前にいた土門に視線を合わせた。
その直後、彼は瞳を大きく見開き、よろよろと立ち上がり後ずさ
った。

だが、力が思うように入らないのか、そのまま後ろによろめいて
しまう。

「おっとお。大丈夫？」

受け止めたのは、鈴奈だった。

土門と秋が、そろって安堵のため息をつく。

一方一之瀬は、驚きと怯えをはらんだ瞳で鈴奈を仰ぎ見ていた。
まだ微かに深紅の面影があるそれは、明らかに揺れていた。

鈴奈がどう言葉をかけるべきか迷っていると、彼女の先に口を開
いた者がいた。

「カズヤ、ちょっとこっちに来い」

マークだった。

既に立ち上がり、軽く自分の腕を組んでいる。

感情を読めない口調に、円堂は一度彼の表情を窺った。
だが、表情からも、彼の真意は読めない。

鈴奈に支えられたままの一之瀬は、俯き、弱々しく首を振った。

「…行けないよ」

それは、身体のことを意味したのか。否、当然そうではないだろう。

独り言を呟くように、一之瀬は言葉を紡ぐ。

「こんなことしたんだ、俺はもうそっちには帰れない。
そこはもう、俺の居場所じゃないから…」

小さく、一之瀬が拳を握った。

秋は彼の背中に、無残に折れた翼を見た気がした。
ハーフタイムに言われた言葉は、今も頭の中に反響している。
だが、時間が経つにつれて、それは違う響きを彼女の心に残していた。

昔彼が彼女の心を傷つけたように、今は自分が、彼の心を傷つけていた。

いつかは分からない。けれど、そんな気がした。

その傷ついた心が、今の言葉を吐き出したのか。

一之瀬の言葉を聴いたマークは、ゆっくりと芝のフィールドを踏みしめた。

一步、また一步と、一之瀬との距離を埋めていく。

マークが目の前に立ち止まると、一之瀬は身体を強張らせた。

「…っ」

マークが息を止めるのが分かった。

そこから先は、まさに一瞬の出来事だった。

俯く一之瀬の胸倉を掴み、強引に上を向かせる。

青白い頬に向けて、マークが空いた右手を振りかぶる。

ぱしんっ、という乾いた音が、その場に響いた。

メンバーたちが少しだけ騒いだ。

何人かが声を上げようとしたが、それをディランが片手で遮る。

「Keep quiet, please. マークのしたいように
させてやってくれ」

ユニコーンの10番を背負った背中が、有無を言わせぬ迫力を醸し出していた。

右手を収めたマークは、一之瀬を真っ直ぐ見つめた。
目の前の彼は驚いたような目で自分を見返している。

堪えようと思っていたが、やっぱり無理だった。

「俺たちはアメリカ代表ユニコーンだぞ！全員でユニコーンを背負っているんだ！

お前が欠けたユニコーンは、ユニコーンじゃない！

何があっても、ここはお前の居場所だ！

アメリカにいようが、ジャパンに行こうがな！…だからッ、そんなこと、絶対に言っな…！」

泣いていた。

背中しか見えていない円堂たちも、彼の口調の変化でそれを察した。

マークを呆然と見ていた一之瀬は、程なくして口を開いた。

「…、ごめん」

「馬っ鹿一之瀬え！」

しみみりした空気に耐え切れず、円堂が声を上げた。
一之瀬の隣に立ち、太陽のような笑顔を彼に向ける。

「いついときは、別に言うことがあるだろ？」

その言葉に、はっとしたように一之瀬が目を見開く。

おぼつかない足取りでマークに向き直り、小さく言った。

「…ありがとう」

それをきっかけに、メンバーたちに和やかな空気が漂う。
明るい第一声をあげたのはディランだった。

「まっ、髪の毛焦がしたマークに言われても、あんまり説得力ないよネー！」

「…ぐすっ、お前も焦げてるぞディラン。特にアイガード」
「Oh、Noooooooooo！」

騒ぎ出すアメリカン二人に、一之瀬は淡い笑みを浮かべた。

そこに、二つの足音が近づく。

「一之瀬！」

笑顔で声をかけてきたのは、染岡だった。
一瞬解けていた緊張が、再び一之瀬の身体を凍らせる。

「…染岡、あの…」
「悪かったな」

「…え？」

自分より先に謝られ、一之瀬は思わず上ずった声を出した。

「試合前、あんなこと言っちゃまったろ。自分のこと棚に上げてさ。だから、さ」

「…違う、謝らなくちゃいけないのは俺のほうだ。あんなこと…」
「いやむしろ、染岡くんよりも謝らなくちゃいけない相手が、後ろにいるんじゃないかな」

今まで一言も口を挟んでいなかった鈴奈が、染岡のすぐ後ろを指差した。

そこには、盛大に眉を吊り上げた吹雪が、彼に隠れるようにたっていた。

「…吹雪も、ごめん」

「…ふふっ、だーまさーれた！」

ころりと表情を変えた吹雪に、一之瀬は思わず膝を折りそうになった。

鈴奈が後ろにいないければ、本当に座り込んでいたかもしれない。

「もう気にしてないよ。僕こそ熱くなってひどいことしてごめんね。ベンチに下がって頭冷やして、いろいろ考えてたんだ」

笑顔で言う吹雪に、一之瀬も表情を和らげた。
そこに、ヒロトがやって来る。

「一之瀬君、もしかして寂しかったの？」

「…え？」

思いもよらない言葉をかけられ、一之瀬は思わず声をもらした。

「高宮さんはああ言ってたけど、本当はもう少しあったんじゃない？
俺たちと戦いたかった理由がさ。」

サッカーはある意味みんなとの繋がりがだったんだし、
少しの間とはいえそれができなくなるんだから、置いて行かれる
感じるよね。

…ほら、ちよつと前までは俺もそうだったから。
父さんに必要とされるために、サッカーしてたからさ。
だから、君の気持ちも分かる気がするんだ」
「そうかもしれない。…ありがとうヒロト」

一之瀬は笑い、ヒロトに言った。

穏やかな風が、雲を少しずつ押していく。
その切れ間から差し込んだ日差しに髪を煌かせながら、鈴奈が言
った。

「帰ろうよ、私たちの居場所にさ」

『千切れて消えた絆の糸は、どうなってしまったの？』
『再び彼らを強く結んだんだよ。』

繋ぎ合わせたものは脆いけれど、彼らならき
つと大丈夫』

??

千切れて消えた絆の糸は（後書き）

何気に一之瀬がヒロトのこと名前で呼んでますが、
どこに接点あったのとか、そういうツツコミはなしの方向で^^；

??

飛べなくなった不死鳥は

ガルシルドの屋敷での試合から、もう3日が経った。

円堂たちはついにブラジル代表ザ・キングダムとの決戦の日を迎えていた。

あの試合のあとすぐに病院に運ばれた俺は、丸一日眠っていたらしい。

目が覚めたのは昨日の昼過ぎだったんだけど、心配される前に怒号が飛んできてびっくりした。

マークでもディランでも、土門でもない。

こんなことするのはてつきり土門だろうと高をくくってた俺が馬鹿だった。

言い訳する暇も無く脳天に拳骨を叩き込まれた。

痛いつてもんじゃない。竹刀じゃなかった分よかったと思えって怒鳴られた。

心当たりはありすぎるくらいあるから、とりあえず大人しくしておいた。

誰の仕業かは、俺が言わなくても分かるよね？

まあそれはともかく、円堂たちは見事決勝進出。

土門とマーク、ディラン、高宮と一緒に病室のテレビで観戦してたんだけど、

試合が終わった途端、高宮が唐突にパイプ椅子から立ち上がった。それはもう、椅子を蹴倒さんばかりの勢いで。

ちよっと待って、床抜く気？

そんなこと、もし本当に床を抜こうとしても言えるはずがない。

「ふっざけんなあのヒゲ面！証拠不十分で釈放されてただあ！？決定的な証拠だっただろうがああああああッ！！！！！」

あの野郎っていうのは、ガルシルドのことだ。
せつかく逮捕したのに逃げられたんだから、怒るのには俺も同感だ。

けど、怒りの表しようってものがあると思う。
もう一度言っておくけど、ここ病院だから。

高宮のチャームポイントの目立つアホ毛が、
彼女の感情に呼応してびんびんに逆立っている。
やばい、これは俺が怒鳴られた時以上にキレてるな。

「ま、まあ高宮。再逮捕できたんだし、それでいい……」

じゃないか、と言いたかったけど、それどころじゃなくなった。
こっちを振り返った高宮の顔が、般若様に見えたからだ。

「一之瀬君もよくそんなこと言えるね！あいつが何したか全部知ってるでしょ！？」

そんな顔で迫られても困る。

俺は首を縦に振る以外、選択がないじゃないか。

痺れを切らした土門が高宮をなだめようと、

「おい高宮、病院では静かに……っておいしいッ！

それー之瀬のバナナじゃねえか！勝手に食ってんじゃねえ！」

「いいよ土門、俺だってこんなに食べられないし」

「そういう問題じゃバフウ!?」

「土門君一々うるさい！」

俺を振り返って言おうとした土門の顔面に、高宮の投げたバナナの皮がクリーンヒット。

これ……どっかで見たような。俗に言うデジャヴってやつか。

拳をわなわなと振るわせた土門が、バナナの皮を勢い良く床に叩きつける。

そのまま肩を怒らせて高宮に掴みかかった。

けど彼女は、本気なのか冗談なのか、眉間に皺をよせた顔ですり抜けていく。

おいこら待ちやがれ！ やーだね！（怒）

どたばたと騒がしいことこの上ない病室で、マークとディランは暢気にテレビを見ている。

丁度、決勝進出を決めたイナズマジャパンにインタビューが行われていた。

あれ。テレビに映ってる日本代表、何か足りないような。
目を凝らして確かめようとすると、真横からまたもや怒号が。
…そろそろ俺の鼓膜が千切れそうだ。

「けどほんつとに有り得ないんだけど！あれのどこ不十分だって言うんだ！

あいつがいなかったら、円堂君たちの試合ももっと楽になったでしょ！

あーもうッ！思い出ただけでむかつくッ！！」

「だからッ、ここ病院だっつの！

しかもまたそれ一之瀬のリング…って、握りつぶすなああああッ！！

握力試してえんなら外行け外！それにうつさい！！」

土門も十分大きな声じゃないか、って正直思ったけど、これ以上とばっちり受けたくないし、何より面白いから放置しておく。

そのとき、部屋のドアが勢いよく開かれた。

「一之瀬えっ！」

「一之瀬君！」

「円堂！秋！」

満面の笑みで走ってきたのは、円堂と秋。

円堂は前髪を盛大に揺らしながら、叫ぶように言った。

「試合、見てくれたか!？」

「ああ、もちろんだよ!」

「ギンギンだったネ、ユーたち!」

「次は決勝か…負けたら許さないからな」

ほんわかとした空気が俺のベッドを中心に広がる。

が、そのすぐ隣が修羅場だったことを、俺たちは完全に忘れてしまっていた。

「お前ら、そんなに和んでないでこいつ止めてくれ!」

「もー我慢なんない!私が直々にしばいてくれるわぁッ!」

甲高い声にびっくりして振り返ると、そこには土門に抑えられた彼女の姿が。

その片足は窓にかけられている。この人まさか…。

案の定その手に長い物が握られていた。手遅れだとは思いつつも、その長い物を確認してみた。

それは、紛うことなき竹刀。だめだこの人、殺^やる気満々だ。

今頃は牢屋の中なんだろうガルシルドに向けて、俺は静かに合掌した。

窓の外に今にも飛び出しそうな高宮に向かって、秋も止めにかかる。

「待て、待てつて高宮！ここ4階！4階だから！」

「大丈夫！」

「いくら鈴奈さんでも大丈夫じゃないと思います！」

窓際で息巻いている高宮を土門が後ろから羽交い絞めにし、秋が竹刀を奪い取ろうとする。

けど、高宮はそんなことに屈するほどやわな奴じゃなかった。無理矢理窓枠を越えようとしている。

その光景を観戦しながら俺が苦笑していると、

「賑やかだな」

「ミーも混ざる！レッツエンジョイ！」

緊張感の無いマークに、何を？と突っ込みたくなるディラン。二人とも、数日前とは大違いの行動を取っている。

「そうだ円堂、インタビューはどうしたんだ？これ生中継だろ？」

さっき、何か足りないと思ったのも当然だ。

テレビ画面にいるはずの人物が今俺の隣にいるんだから。

ヒロトと吹雪が一緒にインタビューに応じているのを指差しながら気になっていたことを尋ねると、円堂は満面の笑みで答えてくれた。

「面倒くさそうだったから、抜け出してきた！」

「え！？」

「何だよー。フットボールフロンティアを優勝したときは、一之瀬も同じことしただろ？」

「いや、規模が違うと思うんだけど…」

頬をわざとらしく膨らませて円堂はそっぽを向く。

無邪気というか能天気というか。彼の性格は相変わらずだ。

俺と一緒に笑っていると、ズドオオン！！というとてもない音がした。

びつくりして窓を見ると、土門と秋が窓から身を乗り出して下を覗き込んでいた。

どうやら、本当に高宮が飛び降りたらしい。もう一度言うけど、ここは4階だ。

驚いている暇もなく、また部屋のドアが開かれた。

しかも、円堂と秋が入ってきたときよりも激しく。

…あのドア、いい加減ぶっ壊れるんじゃないだろうか。

そんなことを悠長に思っていたら、稲妻みたいな声が響いた。

「「やっぱりここか円堂ー！ッ！」」

うわぁ、びつくりした。

思わずベッドの上で後ずさってしまった。これもデジャヴ。

ずかずかと部屋に入ってきたのは、風丸と鬼道。

二人とも、眉間に凄まじい皺がよっている。

その怒りの矛先が自分じゃないって分かっていても、これは怖い。

当の円堂本人は、目を点にして冷や汗をかいていた。

あ、目が泳いでる。

助けを求めるような視線が俺に向いたけど、どうすることもできない。

ごめん無理、とジェスチャーで伝えようと、円堂は一瞬で半泣きになった。

そこに、容赦の無い雷が落ちる。

「試合が終わってすぐに飛び出して行っただと思えば、やはりここか
！」

「……い、いーだろ！？一之瀬にちよつとでも早く伝えたかったんだ
よ！」

「その気持ちも分からなくもないが、
そのおかげで俺たちがどれだけ苦労したと思っているんだー
！……」

激昂する風丸と鬼道。

おお、円堂がすごく小さく見える。フィールドに立ってるときと大違いだ。

苦笑いしながら3人を見てみると、ベッドの隣にあるパイプ椅子に秋が座った。

「脚は大丈夫？」

その質問は、以前土門にされたのと同じもの。

けど、今回は息苦しさみたいなのは感じなかった。

理由はほかにあったけど、相手が秋だったから、なんて言ったら土門はきつと呆れるだろうな。

「大丈夫…とはいいづらいけど、すぐにリハビリを始めるつもりだよ。」

また、みんなと同じフィールドに立つためにね」

「うん。…私も応援してる」

そう言って二人で笑っていると、間にディランが割り込んできた。彼のアイガードをした顔がすぐ近くにある。近い、すごく近い。

そんなことを俺が思っているとも知らず、ディランは言った。

「よしカズヤ！そういうことなら早速リハビリ始めようヨ！」

「そうだな、やろうカズヤ！日本では『金は時なり』って言うんだろ！？」

「待てお前らああ！マークは何か微妙に間違ってるし、

第一あの試合から3日しか経ってないこと分かってんのかー！
ッ！？」

叫ぶ土門に、秋がふふつと微笑んだ。

「土門君、なんだか皆のお父さんみたい」

「うわ、なんか嬉しくねえ！老けてるって言われてるみたいで嬉しくねえ！」

「でもそんな雰囲気醸し出してるし…」。

あ、そうだ。これから土門のこと、お父さんって呼んでもいい？」
「全力で拒否するッッ！！」

顔を真っ赤にして、土門が怒鳴り返してきた。

俺は涙が出るほど思い切り笑った。

笑って、笑って、気が付いたら部屋にいる全員が笑っていた。

俺はあの時、一人になるのが怖かった。

サッカー。それが皆との唯一の繋がりに見えて、それができなるのが恐ろしかった。

悪夢だって何度も見た。あんな奴だって、神様に見えた。

けど、もう大丈夫。迷うこともないし、怯えることもない。

俺は一人じゃないって分かったし、皆の行動と言葉が、支えてくれる。

今思えばただの馬鹿だったんだけど、あの時は本当に必死だった。帰ってきて、高宮に殴られて、やっと気付いた。

『君の願いは、あんなこと円堂君を倒すことだったの？』

その一言で目が覚めた気がした。

俺がしたかったのは、あんなことじゃなかった。

ただ、皆とサッカーができれば、独りぼっちじゃないって分かれば良かったんだ。

そして、土門の言葉。

『全部受け止めるのが仲間ってもんだろっが！』

本当に嬉しかった。

自分のことを思ってくれている仲間がいるって、改めて感じた。

不死鳥は、何度でも蘇る。

今ならはつきり言える。俺は不死鳥だ。

だから、絶対にまたフィールドに舞い戻ってみせる。

翼が折れて飛べなくなってしまったって、

飛びたいという思いがある限り、不死鳥は何度でも空を目指せるんだ。

『飛べなくなった不死鳥さんは、仲間のところへ戻れたの？』

『戻れたよ。この出来事を経て、彼らの絆はもっと強くなった。

彼は再び、仲間と一緒に羽ばたくんだ』

『よかったあ！お姉ちゃん、この本とっても面白かったよ！』

『そう？それは良かった』

『うん！また新しいお話を読んでほしいな！』

『…それじゃあ、これはどうかな？』

この本の、語られなかった物語だ――』

??

飛べなくなった不死鳥は（後書き）

はい、やっとこさ本編が終了いたしました！

いやあ、最初の投稿からもう半年以上・・・

たった12話なのにどんだけかかってるんだ！（笑

消化不良なところは、後々番外編として書くつもりです。

誤字脱字やストーリーとしておかしい所も手直しする予定なので、
また読み返してもらえると嬉しいです^^

では、またの機会に！

Another Words ? (前書き)

外伝その1です。

のせ視点↓秋視点。 試合直後のお話です。

Another Words ?

自分の身体が担架に乗せられて救急車に運び込まれる音に、まるで現実味がない。

目を閉じているから何も見えないし、聞こえる音だってさっき言った通りだ。

がたがた、という誰かが車に乗り込む音。

たぶん、隊員の人か誰かが乗り込んだ音だろう。

大きな音と共に、後ろのドアが閉められる。

そして、車が発車する音。小刻みな揺れに、身体を流す。

フィールドで倒れた時よりは、呼吸は大分楽になっていた。

一度深呼吸をすると、聞こえてくる音がさらに現実味を失っていた。

「…一之瀬君」

だからこそ俺は、海の底から引つ張り上げられたような気分になった。

心配そうだけど何かを恐れているような声。

けど、俺がこの声を聞き間違えるはずがない。

反射的に目を開くと、少しばやけた視界にはねた深緑の髪が映った。

「秋。何で、ここに」

思わず呟くと、彼女は弱々しく笑った。

よく見ると、目が少し腫れている。

まともな状態じゃない俺にだって分かる。秋は強がっている。

「響木監督が、一緒にきてやってってくれて。私も元々そのつもりだったんだけど」

俺は返す言葉に迷ってしまい、秋もそれから何も言わなくなってしまうた。

…気まずいことこの上ない。

謝るべきなのはいくら頭が働いてなくても分かるけど、どう言い出したらいいのか分からない。

車の振動に揺られながら、俺は拳を握った。

「秋、あのさ…」

「…ごめんなさい」

また先に謝られてしまった。

染岡といい秋といい、何で先に言っちゃうんだ。

続いて俺も言おうとしたら、秋が口を開いた。

「ハーフタイムの時ね、鈴奈さんと話をしたの。

それで思ったの。私ずっと、一之瀬君につらい思いさせてたんじやないかって」

「違うよ、それは……」

「嘘言わないで。私知ってるよ？ 一之瀬君が時々、すごくつらそうな顔してたの」

驚いた。まさか見られてたなんて。

あれを知ってるのはてつきり土門だけだと思ってたのに。

少し間を空けたあと、俺も言った。

「俺もごめん。あんなこと言って」

「いいの。びつくりしたけど、その分、

一之瀬君が普段どれくらい私に優しくしてくれてたか分かったから」

そう言って、秋は笑った。

その表情はどこか円堂に似ている。

円堂は太陽って言われるけど、今の秋の笑顔は向日葵ひまわりみたいだ。

つられて俺も笑うと、秋は言った。

「もう一之瀬君にだけ無理させない。あんな悲しい思いなんて絶対

させない。

…頑張るから。一之瀬君がまたサッカーできるようになるまで、私も一緒に頑張るから」

俺の手が暖かいものに触れた。秋の手だった。

言われた言葉とその手の暖かさで、一気に気が抜けてしまった。

「…ありがと、秋」

秋のせいだ。

かつこよく言うつもりだったのに、少し泣いちゃったじゃないか。

握っていた手からいきなり力が抜けて、私は焦った。

「えっ、一之瀬君!？」

慌てて呼びかけるけど、返事は無い。

どきどきしながら様子を窺ってみると、規則正しい息遣いが聞こえた。

体からどつと力が抜ける。もう、心配させないでよ。

まだ少し青白い寝顔は、遠いあの頃と少しも変わっていない気がする。

手をつないだままだったのが少し恥ずかしかったけど、まあいいや。

だって一之瀬君、寝てるんだし。

手を少し強く握り直して、私は一之瀬君に笑いかけた。

「…お帰り、一之瀬君」

寝てるはずの彼がふにやりと笑った気がして、私は耳まで真っ赤になってしまった。

…今日くらい病院にいても、怒られないかな。

『眠る不死鳥と微笑^{わら}う向日葵』

Another Words ? (前書き)

外伝その2です。

今度は病院での話。

以前言っていた鉄建制裁が実現しました(笑

その1とその2の最後の『』は適当です^^;

Another Words ?

ぼやけた白い景色に、黒いものがいくつか。
それが、目が覚めた俺が最初に見たものだった。

「カズヤ、俺たちのことが分かるか!？」

黒いものの一つが俺に呼びかけてくる。
一瞬で誰か分かった。けど、視界がはっきりしない所為で顔がよく見えない。

ぼやけた景色を元に戻そうと目をこすりながら、俺は呟くように言った。

「…マーク…?」

かすれた声が出た。

けど相手にはちゃんと聞こえたのか、安堵するのが分かった。

ようやくはっきりと見えるようになってきた。

俺の周りには、マーク、デイルン、土門、高宮の4人。

「良かった、やっと目が覚めたんだネカズヤ!」

「つつても、まだ2日しか経ってないけどな。心配させやがって、

この！」

土門の手が俺の頭を乱暴にかき回す。

その暖かさがやけに懐かしく感じた。離れていたのはたった一週間くらいのはずなのに。

腕に力を込めて身体を起こすと、少し眩暈がした。

またベッドに突っ伏しそうになって少し慌てたけど、ディランが支えてくれて助かった。

お礼を言つと、彼はにっと笑った。

friendなんだから、当たり前だろ？

思わず泣きそうになってしまった。

ディランはずるいや。冗談めかした口調で、人を泣かそうとするんだから。

その時、俺は聞いた。

静かな怒りを含んだ、囁きを。

「行くよ」

次の瞬間、俺の頭が盛大に火花を散らした。

視界が一瞬暗くなって、星が飛ぶ。

理由は単純明解。高宮が俺を殴ったからだ。

さっきの一言はさしずめ、犯行予告といったところだろうか。

脳天を両手で押さえて悶絶する俺の上から、さらに怒号が降りかかる。

「やっと目エ覚ましたなこのアホ！

言いたいことは山ほどあるが取り合えずこれだけ言ってやる！

この悪性うつ病野郎！ガルシルドんとこ行つた云々はこの際どうでもいいが、

それでもやっていいことと悪いことつてもんがあるだろ！！

今の一発はそのお返しだ！

竹刀で頭真つ二つにされなかったただけ良かったと思えッ！！」

怖い。その一言に限る。

高宮がぶちキレるところは何度か見たけど、自分に向けてかそうでないかで全然違う。

これは怖すぎる。

普段ふにやふにやした感じの口調と雰囲気とは大違いだ。

今彼女が竹刀を持っていたら、俺は確実に地獄行きの片道切符を渡されていた。

高宮の絶叫は止まらない。

「大体！毎回あんたは程度が過ぎるんだよ！

今大会で大手術隠して試合でるわそのおかげで選手生命脅かすわ、終いには犯罪者とするんで好き勝手やりだすわ！

いい加減懲りたらどうなの！？

君の事を心配してる大勢の人たちの気持ちを考えろッ！」

まったくもってその通り。

説教されるのは覚悟してたけど、まさか高宮にとは。

謝ろうにも、彼女が矢継ぎ早に言葉を吐くもんだからその暇も無い。

「ちょ、高宮…。一之瀬も病み上がりなんだし、あんまり…」
「黙ってて!!」

恐る恐るといった感じで言った土門を、高宮は一瞬で制する。

土門も、伸ばしかけていた腕をすぐに引っ込めた。

諦めたように首を振ると、マークとディランを連れて部屋を出て行った。

すると、高宮が静かになった。

はぁー、と長い息を吐く。あまりの変わりように、俺は逆に身が強張った。

「さて、本題に入ろうか」

…ちょっと待って。

あれだけ言っておいて、あれは本題じゃなかったっていうのかこの人は。

一瞬反抗的になりそうだったけど、彼女の表情を見て、やめた。
高宮は静かに微笑んでいた。

「秋ちゃんとは話せた？」

「…少しだけ」

「なら良かった」

にこっと笑う高宮。

さつきとは、本当にすごい変わりようだ。

「これから一緒に頑張るから、って言ってくれた」

「そう。秋ちゃんらしい言葉だね」

それから、俺は高宮に話した。

救急車の中での会話を、ほぼ偽り無く。

最後まで静かに聴いた高宮は、最後に俺に言った。

「目が覚めたら訊こうと思ってたんだけど…。
君の願いは、あんなこと円堂君を倒すことだったの？」
「違う！」

反射的に言い返すと、高宮はまた笑った。

「そう言つと思つてた。なら、また翔べるね」

高宮がそう言つた途端、部屋のドアが開いた。

そこから、土門、マーク、デイランの3人が顔を覗かせる。

「おつ、話終わったか？」

「うん。部屋追い出す形になっちゃってごめんね」

「俺はあの空気に耐えられるほど丈夫じゃねえからな」

その言葉に、マークとデイランが笑う。

やーい、ドモンの弱虫ー。なんだとこのやろっ！

取っ組み合いになる3人を見ながら、俺は高宮に言ってみた。

「ねえ高宮。さっきの、まだ痛いんだけど」

「あああれ？一応手加減したんだけど…」

「えっ」

当たり前のように言う高宮に、俺は背筋が凍った。

本当、この人の本気は計り知れない。

頭はまだズキズキと痛かったけど、ここへ帰ってこられた証のよ
うな気もして少し嬉しかった。

…
ドMか俺は。

『憤怒と希望の使者』

Another Words ? (前書き)

外伝その3。

虚構の魔術師さんからのリクエストです。

例によっていろいろおかしいので、後で改訂するかもです。
チームガルシルドの人たちはいい人。

Another Words ?

屋内練習場に、無数の足音が響く。
続いて、ボールを蹴る音。

「コヨーテ！」

「よし、カズヤッ！」

鋭いパスを俺は難なく受ける。

これは、以前の俺ならできなかったことだ。

ゴール前にはフォクスさんが構えてる。
よし。

「はぁッ！」

気合一発。

右足から繰り出したシュートは、カーブを描きながらゴールネットに突き刺さった。

ネットが揺れる音が気持ちいい。

けど、どうやら体勢がおかしなことになっていたらしい。
蹴った反動で、勢い良くその場にしりもちをついてしまった。

「ったあゝッ」

手でさすっていると、頭の上から笑い声が降ってきた。

「ナイスシュート、とはいづらいな。フィールドの魔術師さんよ？」

「今のは偶然ですっ」

悪態をつきながら、コヨーテさんの手を借りて立ち上がる。
口から下はマフラーで分からないけど、目は面白そうに笑っている。

「通常シュートでこんなことになるのなら、あれを使ったら吹っ飛ばんじゃないか？」

今度は、ボールを手に取ったフォクスさんが言う。
ちよつと失敗しただけでこれだ。

何もチーム全員でからかわなくなっているのに。

「だからっ、偶々なんですって！本番ではこんな失敗、絶対しませんよ！」

「練習から意気込むのはやる気があっていいことですが、それで怪我したら元も子も無いんですよ？」

困るのは私たちじゃなくてあなた自信だってことを忘れてもらっ

ては困ります」

うつ、痛いところ突かれた。

こんな説教じみた口調で言うのは、このチームには一人しかいない。

「分かってますよヘンクさん……」

「いや、分かってません。」

技の威力に負けて吹き飛ばされて、全身骨折しても知りませんよ」

「ははっ、そりゃ洒落にならねえな!」

「だいたいあなたは……」

「まーまーヘンクもそこらへんにしとけ」

まだ何か言おうとしていたヘンクさんを、スコープオさんがなだめる。

そのままフォクスさんも一緒になって、何処かへ歩いていった。

俺がげんなりしていると、コヨーテさんが言った。

「真摯に受け止めることだな。」

ヘンクの甲斐性は元からだ、お前もお前だ。危なっかしすぎる」

「えっ、ヘンクさんっていつもあんな感じなんですか?」

「おい、後の言葉聞いてたか?」

コヨーテさんは俺のほうを見て呆れたような顔をしたけど、やが

てため息をついた。

「ま、俺たちが故郷にいた時からあんなだったな。

面倒見がいいといえばそれまでだが、お節介だという取り方もある」

「確かに。それすごく分かります」

「ガルシルドを利用して祖国を救うって言い出したのもあいつだっ
たしなあ」

「そうなんですか!？」

初耳だ。

「コヨーテさんがあの人のことをさらっと呼び捨てにしたのも驚いたけど、

ここにいる目的が、まさか自分たちの国を救うためだったなんて

すごいなあ。

自分の国のために、そこまでやれる人たちなんだ、ここにいるのは。

「ヘンクさんって、本当にいい人ですね」

「ああ。お前もそう思うか」

「はい!あ、でも、それならこのチームの人全員いい人だと思いま
す」

「おつ、嬉しいな。何でだ?」

俺より少し身長が高いのを利用して、コヨーテさんは俺の顔を上

から覗き込んでくる。

その目は、とても優しい色をしている。

「俺が初めてここに来たとき、自然に受け入れてくれたじゃないですか。

コヨーテさんたちから見たらただの他人のはずなのに、これからよろしくな、って握手もしてくれた」

「そりゃあお前、緊張でガツガチだったからなあ面白いくらいに」
「それ言わないでくださいっ！」

たく、ちよつといいこと言っただつたのに、またこれだ。
すぐに俺をからかいたがるんだから、このチームの人たちは。

「おつ、あいつら帰ってきたな。練習再開だ、行くぞ！」

「はいッ！」

何やらまだ言い合っているヘンクさんたちのところに、俺は走った。

走りながら、一つのことを決意した。

今度の円堂たちとの試合。

自分のためだけじゃなくて、このチームの人たちのためにも頑張ろう。

この人たちへの恩返しになるように。

試合の勝敗は、その後だ。

運命の試合まで、あと2日。

『悪魔の仮面を被った騎士』

Another Words ? (前書き)

外伝その4。

虚構の魔術師さんのリクその2です。

今回でこの小説は完結にしようと思います。

Another Words ?

「真・ユニコーンブースト!!」

マークとディランの放った技に、キッドが果敢に飛び掛る。
けど、ゴール前で大きく弧を描いたシュートはそのままネットを揺らした。

「ナイスシュートだ、二人とも!」

ボールを拾い上げながらキッドが言う。

俺はフィールドの外にあるベンチに座って皆の練習を見学していた。

まあ、当然といえば当然のこと。

FFIが終わってからまだ一ヶ月ほどしか経っていないし、
脚だって松葉杖なしだとまともに歩けない。

アメリカに帰ってきたときは、まず監督に一発殴られた。
しかもよりによって高宮に殴られたところと同じとこ。
痛かった。その一言に限る。

「よし、今日の練習はそこまでだ!」

隣に立っていた監督が言った。
見れば、日は西に傾いて紅く染まっていた。

帰り道。

公園のベンチをチーム全員で占拠して、俺たちは話をしていた。

近くで買ったハンバーガーを頬張りながら、ミケーレが言う。

「いいよなあマークたちは！日本の皆と一緒に試合したんだろ？」

「成り行き上な」

「一之瀬のせいというか、おかげというかな！」

「痛い！土門痛いつてば！」

俺の後ろに回りこんだ土門が、俺の頭を手でぐりぐりする。

涙目で後ろを振り返ると、土門は意地の悪い笑顔をしていた。

「でも今思えば、カズヤあの時凄かったよネ！一人で日本の皆を翻弄してさ！」

「何だそれ！俺も見なかった！」

「いや見なくていい！てか、人の黒歴史掘り返して楽しいの！？」

『ああ！』（満場一致）

あ、今一瞬みんなが悪魔に見えた。

「もういいよ！俺帰るよ！？」

「いや待て待て待て！冗談だよカズヤ！」

やけになって喚くと、シヨーンが慌てて立ち上がった。

みんなが笑う。そして一通り笑った頃、キッドが少し真面目な口調で言った。

「何はともあれ、カズヤがちゃんと帰ってきてくれてよかったよ」

「そうそう。そこが大事だよネ！」

ディランが笑う。

俺の脳裏に、あの時のマークの言葉が浮かんた。

『何があっても、ここはお前の居場所だ』

駄目だ、また泣きそうだ。

ここ一ヶ月くらいで、俺の涙腺は何度決壊したんだろうか。

少ししんみりしていると、シヨーンが言った。

「そうだ！今日みんな俺ん家泊まりに来ないか！？」

「えっ、いいのか！？」

「Of course！」

彼の眼鏡が得意そうに輝く。

「ならさ！俺の主演ドラマのDVD見てくれよ！結構いい話なんだぜ！」

「いや！練習した後のクールダウンに、ホラーはどうだ！」

「それクールダウンって言わないんじゃないかな」

「わいわいと盛り上がるみんなに巻き込まれながら、俺は思った。

…ちゃんと、戻って来れたんだ。

その後はショーンの家でパーティ騒ぎになった。

そう。騒がしいけど賑やかなところが、俺の居場所だ。

『ある日の一角獣』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2107q/>

飛べない不死鳥

2011年11月16日14時25分発行